4大学連携 シンポジウム

外国にルーツのある子どもたちと共に生きよう

茨城県北部地域での多様な文化を尊重し合う子育て・子育ち環境の検討

2023年 7.1(土)

茨城キリスト教大学 8号館大講義室

４大学連携シンポジウム
外国にルーツのある子どもたちと共に生きよう
報告書

２０２３年7月

目　次

・はじめに……6
・概　要……8
・開会挨拶　茨城キリスト教大学 学長　上野尚美氏　……14
・趣旨説明［解題］
県北地域における多文化共生の現状と課題の整理
―外国にルーツのある子どもたちの成育環境と健康・発達問題を中心に―
茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科　岩間信之氏　……15
第１報告
外国人児童生徒教育における地域間格差の転換を目指して
―茨城県全域を対象としたオンライン日本語支援プロジェクト―
筑波大学 人文社会系　澤田浩子氏　……21
第２報告
外国にルーツのある子育て世帯への支援と子育て支援室アンネローゼ・IC with U
プロジェクトの今後の展開　―県北での支援体制づくりを目指して―
茨城キリスト教大学 文学部 児童教育学科　中島美那子氏　……27
第３報告
外国にルーツのある子どもへの地域での日本語・学習支援を考える
―「にほんご水戸の部屋」の取り組みから―
常磐大学 人間科学部 コミュニケーション学科　飯野令子氏　……34
第４報告
外国にルーツのある親子の人的ネットワーク構築をめざす活動事例報告
―東京都日野市における地域日本語教育の新しい形―
茨城大学大学院 理工学研究科 工学野 数理・応用科学領域　福村真紀子氏　……41
・パネルディスカッション　……48
・閉会挨拶　茨城キリスト教大学 文学部長　池内耕作氏　……56
・アンケート結果　……60

はじめに

シンポジウムの開催にあたって

在留外国人数が増加し、また優れた外国人材の必要性が高まるなか、多様性・包括性のある社会の実現を目指す多文化共生の推進は、我が国の重要な社会課題となっています。全国スケールで見た場合、在留外国人の大半は外国人散在地域（外国籍の住民がコミュニティを形成せず、分散して暮らしている地域）で暮らしています。外国人散在地域はいわゆる「外国人の顔の見えない定住化」[1)] が顕著であることから、多文化共生社会を実現させる上で多くの課題を残しています。

なかでも、近年増加している外国にルーツのある子どもたちへの対応は、大きな課題です。散在地域では、外国にルーツのある子育て世帯が相対的に少なく、かつ分散して暮らしています。そのため、こうした子どもたちへの支援が難しい状況にあります。また、いわゆる日本人の子どもと外国にルーツのある子どもの交流機会が少ないことも残念です。外国人散在地域ならではの多文化共生の仕組みづくりを、真剣に検討する必要があります。

茨城県は、全国的に在留外国人が多い地域です。また、茨城県北部地域（以下、県北地域）は、県内の典型的な外国人散在地域に該当します。そこで、県北地域の多文化共生をキーワードとしたシンポジウムを開催しました。内容は次の5点です。1）県北地域における多文化共生の現状と課題の整理、2）オンラインを活用した日本語教育体制の構築、3）外国にルーツのある世帯への子育て支援と子どもたちの異文化交流の仕組みづくり、4）都内の先駆的な支援事例に関する情報共有、5）パネルディスカッション。

今回の大学連携シンポジウムでは、4大学の活動内容を中心に議論を行いました。しかし、大学以外にも、学校の先生方や行政の担当部署の方々、日本語学校・日本語教室の皆様など、外国にルーツのある子どもたちを支えている団体・個人は大勢いらっしゃいます。次回は、こうした方々を中心とした場を設けたいと考えています。

県北地域の支援活動は、まだまだ「個」の状態です。個々の活動には限界があります。今回のシンポジウムを契機に、支援活動の「輪」が形成されることを願っています。また、本シンポジウムの検討内容は、全国の外国人散在地域で共通する重要な社会課題です。在留外国人の大半は散在地域で暮らしています。将来的は、全国の外国人散在地域で情報共有をしていきたいと考えています。

当日は、急な広報であったにも関わらず、幼稚園～高校の先生方や行政関係者、日本語教室関係者など、合計180名の方にご来場いただきました。厚く御礼申し上げます。

最後に、本シンポジウムを共催してくださった茨城大学、筑波大学、常磐大学、および後援いただいた茨城県国際交流協会、茨城県県北生涯学習センター、茨城県教育委員会、日立市教育委員会、NICE（茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク）に、改めて御礼申し上げます。

茨城キリスト教大学　地域・国際交流センター長
岩　間　信　之

1）長時間労働に従事する外国人労働者は、生活圏が職場と自宅で完結しがちである。また、日本語が苦手である人も多い。こうしたことから、外国人住民は日本社会になかなか溶けこめず、孤立する傾向にある。こうした状況は「顔の見えない定住化」と表現される。
梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005.『顔のみえない定住化』名古屋大学出版会.

概　要

4大学連携シンポジウム　外国にルーツのある子どもたちと共に生きよう プログラム

1．開催日時

2023年7月1日（土）　13：30～16：30（17：00から「NICE焚火部コーヒー・サーブ」）

2．開催形式

現地開催（会場：茨城キリスト教大学8号館8101教室）

3．プログラム

- **開会挨拶**　茨城キリスト教大学学長　上野尚美氏
- **趣旨説明［解題］：**県北地域における多文化共生の現状と課題の整理
  —外国にルーツのある子どもたちの成育環境と健康・発達問題を中心に—
  ：茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科　岩間信之氏
- **第1報告：**外国人児童生徒教育における地域間格差の転換を目指して
  —茨城県全域を対象としたオンライン日本語支援プロジェクト—
  ：筑波大学 人文社会系 澤田浩子氏
- **第2報告：**外国にルーツのある子育て世帯への支援と子育て支援室アンネローゼ・IC with Uプロジェクトの今後の展開　—県北での支援体制づくりを目指して—
  ：茨城キリスト教大学 文学部 児童教育学科　中島美那子氏
- **第3報告：**外国にルーツのある子どもへの地域での日本語・学習支援を考える
  —「にほんご水戸の部屋」の取り組みから—
  ：常磐大学 人間科学部 コミュニケーション学科　飯野令子氏
- **第4報告：**外国にルーツのある親子の人的ネットワーク構築をめざす活動事例報告
  —東京都日野市における地域日本語教育の新しい形—
  ：茨城大学大学院 理工学研究科 工学野 数理・応用科学領域　福村真紀子氏
- **パネルディスカッション**

  モデレーター　茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科　中山健一氏

  パネリスト

茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科	岩間信之氏
筑波大学 人文社会系	澤田浩子氏
茨城キリスト教大学 文学部 児童教育学科	中島美那子氏
常磐大学 人間科学部 コミュニケーション学科	飯野令子氏
茨城大学大学院 理工学研究科 工学野 数理・応用科学領域	福村真紀子氏
茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科	勝山紘子氏

- **閉会挨拶**　茨城キリスト教大学文学部長（兼NICE会長）　池内耕作氏

4．司会

茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科（日本語教育担当）　中山健一氏

【会場風景】

開会挨拶（上野尚美氏：茨城キリスト教大学学長）

シンポジウム会場（来場者180名）

シンポジウムの様子

閉会挨拶（池内耕作氏：茨城キリスト教大学文学部長）

来場者との意見交換

焚火を起こした野外テント

焚火コーヒーのサーブ会場

焚火コーヒーを楽しむ来場者

【司　会】

中山　健一氏
茨城キリスト教大学
文学部 文化交流学科
（日本語教育担当教員）

【趣旨説明（解題）】

岩間　信之氏
茨城キリスト教大学
文学部 文化交流学科
（地域・国際交流センター長）

【第１報告】

澤田　浩子氏
筑波大学 人文社会系

【第２報告】

中島　美那子氏
茨城キリスト教大学
文学部 児童教育学科

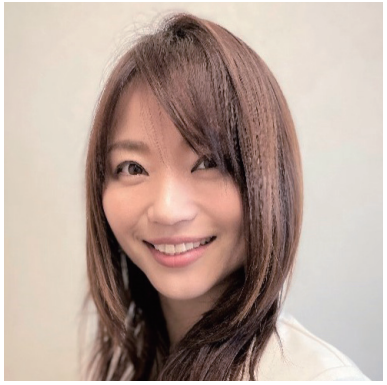
【第３報告】

飯野　令子氏
常磐大学 人間科学部
コミュニケーション学科

【第４報告】

福村　真紀子氏
茨城大学大学院 理工学研究科
工学野 数理・応用科学領域

【パネルディスカッション】



勝山　紘子氏
茨城キリスト教大学
文学部 文化交流学科

外国にルーツのある子どもたちと共に生きよう

茨城県北部地域での多様な文化を尊重し合う子育て・子育ち環境の検討

近年、多様性・包括性のある社会の実現を目指す『多文化共生の推進』が、日本の重要な社会課題となっています。なかでも、外国にルーツのある子どもたちへの対応は、喫緊の課題です。あまり知られていませんが、日本にいる外国人の大半は、いわゆる外国人散在地域で暮らしています。こうした地域は外国人住民の「顔の見えない定住化」が顕著であり、多文化共生の点で多くの課題を残しています。茨城県北部地域も例外ではありません。

そこで今回、外国にルーツのある子どもたちにスポットを当て、県北地域の子育て・子育ち環境を考えるシンポジウムを開催します。

大学連携 シンポジウム

2023年 7.1(土)

茨城キリスト教大学 8号館大講義室

13:00 開場
13:30 開会
13:35 県北地域における多文化共生の現状と課題の整理
- 外国にルーツのある子どもたちの成育環境と健康・発達問題を中心に -
茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科 教授 岩間 信之氏

13:50 外国にルーツのある子どもたちへの支援活動報告
1. 外国人児童生徒教育における地域間格差の転換を目指して
-茨城県全域を対象としたオンライン日本語支援プロジェクト-
筑波大学 人文社会系 准教授 澤田 浩子氏
2. 外国にルーツのある子育て世帯への支援と子育て支援室アンネローゼ・IC with Uプロジェクトの今後の展開
-県北での支援体制づくりを目指して-
茨城キリスト教大学 文学部 児童教育学科 教授 中島 美那子氏
3. 外国にルーツのある子どもへの地域での日本語・学習支援を考える
-「にほんご水戸の部屋」の取り組みから-
常磐大学 人間科学部 コミュニケーション学科 教授 飯野 令子氏
4. 外国にルーツのある親子の人的ネットワーク構築をめざす活動事例報告
- 東京都日野市における地域日本語教育の新しい形 -
茨城大学 理工学研究科 工学野 数理・応用科学領域 助教 福村 真紀子氏

15:50 休憩
16:00 パネルディスカッション
16:30 閉会

申込は こちらから ▶

主催：茨城キリスト教大学
共催：茨城大学・筑波大学・常磐大学
後援：茨城県国際交流協会・茨城県県北生涯学習センター
茨城県教育委員会・日立市教育委員会・NICE

お問い合わせ
茨城キリスト教大学 地域・国際交流センター
※駐車場はありません。ご来場は公共交通機関をご利用ください。
〒319-1295 茨城県日立市大みか町 6-11-1
TEL:0294-52-3215(代)

報　告

開式挨拶

茨城キリスト教大学　学長　上野　尚美

このたびは、4大学連携シンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。みなさまもご存じの通り、近年日本でも在留外国人数が増加しています。また、優れた外国人材の必要性も高まっています。こうしたなか、多様性・包括性のある社会の実現を目指す多文化共生の推進は、我が国の重要な社会課題となっています。なかでも、外国にルーツのある子どもたちへの支援は、まさに喫緊の課題です。この問題に関して、外国人住民が多く暮らしている「外国人集住地域」が、しばしばクローズアップされています。しかし、のちほど本学の岩間から説明があるように、実は茨城県北部地域のように外国人が相対的に少ない「外国人散在地域」でこそ、問題は深刻です。

こうした状況を受け、本学では2020年より「IC with U」という支援事業を全学的に展開しています。詳しくは、後ほど本学の中島より説明があります。また、茨城大学や筑波大学、常磐大学でも、外国にルーツのある子どもたちに対して、すばらしい支援事業を展開されています。本日は、各大学の先生方にもご登壇いただく予定です。私も、先生方のご報告を楽しみにしています。

外国にルーツにある子どもたちは県内各地に散在しているため、一つの組織では、とても対応しきれないと思います。本日は、４大学の関係者のほか、外国由来の子どもたちを支えている多数の自治体や支援団体の皆様にも、お越しいただいていると伺っています。改めて御礼申し上げます。今回のシンポジウムをきっかけに、県北地域の子どもたちを支える強固なネットワークが構築されることを願いつつ、開式のあいさつとさせていただきます。

趣旨説明［解題］

県北地域における多文化共生の現状と課題の整理
―外国にルーツのある子どもたちの成育環境と健康・発達問題を中心に―

茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科　岩間　信之

今回のシンポジウムの目的は、典型的な外国人散在地域である茨城県北部地域（以下、県北地域）を事例に、外国にルーツのある子どもたちに対する日本語などの教育支援の現状と課題を、茨城キリスト教大学、茨城大学、筑波大学、常磐大学の活動事例を中心に検討することにあります。そこでまず、私の方から外国人散在地域の現状を地理学的な視点から紹介しました。研究の性質上、地名は伏せてあります。県北地域とも共通する、外国人散在地域での事例研究としてお考え下さい。

分析結果は次の通りです。第1に、外国人世帯への支援状況には、明確な地域差が存在します。X県の在留外国人はⅠ・Ⅱ地域に集住しています。そこでは、互助性の高いエスニック・ネットワークが形成されています。また、行政による多言語対応や小・中学校での日本語学習支援も、相対的に充実しています。その一方で、外国人散在地域であるⅤ地域では、同胞や行政からの支援が希薄です。第2に、外国人散在地域に該当するA市で3歳児健診データを分析した結果、子どもたちの成育環境と健康状態に明確な関連が確認されました。育児における社会的資源（家族による子育て支援、社会による子育て支援）が不足すると育児様態が悪化し（子育ての時間および労力不足、子育てに対する知識不足）、その結果う蝕（虫歯）などの健康被害が生じる可能性が高くなります。特に、所得が低く地域社会から孤立していると推測される外国人世帯の子どもにおいて、健康被害が顕著でした。中でも、う蝕の割合はとびぬけて高いです。就学前児童のう蝕は、子どもの成育環境を如実に反映します。また、全国的に子どもの虫歯は減少傾向にありますが、貧困層では増えています（社会格差を測る指標の一つ）。くわえて、外国にルーツのある子どもは、日本人の子どもに比べて健康全般や発達障害上も問題があることも、この分析から示唆されました。これらは、外国人世帯に対する社会的排除の現状を端的に示す実例です。

なお、本研究は外国人散在地域での事例研究であり、一般性を担保するには限界があります。さらなる研究蓄積が求められます。また、本研究から、すべての外国人世帯で問題が生じているわけではないことも明らかになりました。日本社会に根付き、立派に子育てをしている世帯も多いです。この点も正しく認識する必要があるでしょう。

外国人散在地域では、社会による子育て支援の不足が顕著です。在留外国人数が相対的に少なく、かつ分散しているという散在地域の特徴が、社会による支援を困難にしています。こうしたハンディをどのように克服するかが、県北地域の課題であると言えます。

大学連携シンポジウム：外国にルーツのある子どもたちと「共に生きよう」

趣旨説明［解題］

：外国人散在地域における多文化共生の現状と課題の整理

—外国にルーツのある子どもたちの成育環境と健康・発達問題を中心に—

茨城キリスト教大学
地域・国際交流センター長
岩間信之
inob@icc.ac.jp

本シンポジウムの趣旨

外国にルーツのある子どもたちが置かれている環境と支援の課題を共有した上で、県北地域の子育て・子育ちを考える。

・4大学を例に，**現在取り組まれている支援活動の内容と課題**を共有する。また，県外の**先駆的な事例**についても情報を共有する。

・フロアの皆様（外国人支援組織、行政、学校関係者、その他方々）とともに、外国人散在地域での**子育て・子育ち環境**のあり方について考える。

↓

連携のきっかけづくり
（最初の一歩）

日本語教育・子育て支援の素人である私の気づき

私は子育ての中で，日本（特に地方）が**外国にルーツのある子どもたち**にとって厳しい環境であることを実感した。

外国人散在地域では、外国ルーツの子どもの存在が地域社会では十分には認知されていない。外国ルーツの家族は社会から孤立しやすい。

外国人集住地区に暮らす外国人は，全体の**4.5%程度**（実は集住地域こそマイノリティ）。

↓

全国的な課題である。

問題の背景①　子どもたちを取り巻く環境

日本語指導が必要な児童生徒数　**58,307 人**(2020年現在)

⇒ 14年間で1.74倍に増加

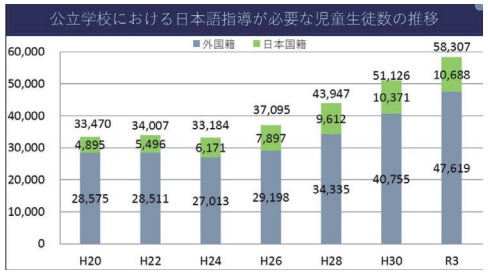


図　公立学校における日本語指導が必要な児童生徒の推移

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に 関する調査（令和3年度）」

増加のペースに学校が対応しきれない

＊外国籍の児童にとって就学は義務ではない。入学案内を発給し，希望があれば対応。

問題の背景② 子どもたちを取り巻く環境

◇ **ドロップアウトする子どもたち**

⇒ 外国にルーツのある子どもたちにおける，高校中退率や非正規就職率の高さ（是川2018，朝日新聞2018年9月30日,など）。

◇ **母語教育の欠如とダブル・リミテッド問題**

⇒ 日本語・母語ともに不十分な子どもたちの増加（田巻など）

⇒ 学習言語としての日本語を習得する上での母語教育の重要性（野元2006など）

◇ **健康被害，発達障害の可能性**

⇒ 外国にルーツのある子どもたちにおける，**健康被害**（肥満，痩せ，虫歯など）や**発達障害**の拡大（田代ほか2005，黒葛原ほか2011，など）

5

問題の背景③ 就学前期における成育環境の重要性

◇ **［健康］** 幼児期における**家庭での生活習慣**（食事，睡眠など）の重要性（中堀ほか2016，など）．

◇ **［学習］** 学習言語を習得する上での，**幼児期の家庭教育**（日本語や母語での日常会話，本の読み聞かせ，母国文化の教育など）の重要性（ジェームズ・J・ヘックマン2015，など）．

↓

成育環境（ここでは家庭での教育や家族とのふれあい，食生活，生活習慣など）が重要となる。

↓

親が長時間労働に従事する外国人世帯では，成育環境の保持が困難（かながわ国際交流財団2016,など）。

↓

行政や地域住民，同胞による生活支援が不可欠。
生活支援には**地域格差**（散在地域は支援が希薄？）

6

問題の背景④ 外国人散在地域の課題

外国人集住地域では，多文化共生に関する多様な活動や生活支援が展開されている。

↓

一方，**外国人散在地域**は，総数としての居住人口は多いが（在留外国人全体の**94.5%は非集住地域に居住**），社会的な注目度は低く，実態は不明瞭（流動性も高い）。

↓

市役所の担当部局や学校の現場の先生方は，少ないリソースの中で子どもたちの支援に尽力。しかし，**構造的に限界がある。**

7

問題の背景⑤ 多文化共生（協働）の遅れ

これからの時代を生きる日本の子どもたちにとって、**多文化共生（協働）のスキルと経験**の獲得は必須。

↓

外国人散在地域では、こうしたスキル・経験の獲得が困難。

↓

外国にルーツのある子どもたちと**「共に生きる」**ことは、日本人の子どもたちにとっても大切。

8

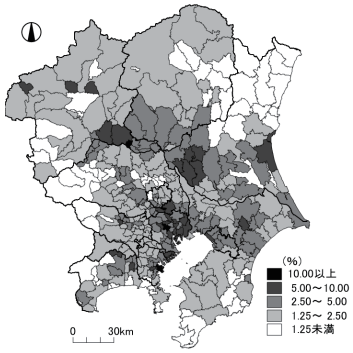
―外国にルーツのある子どもたちの成育環境と健康・発達問題―

3歳児健診データをもとにした，外国ルーツの子どもたちの健康と成育環境の定量的な解析。

岩間信之ほか 2023.外国にルーツのある子どもたちの成育環境と健康被害に関する地理的研究―外国人散在地域での事例研究―.E-journal GEO18（1）：170-185.

在留外国人の概要

関東地方のX県は，全国でも在留外国人が相対的に多いエリア（10位）。
県西・県南地域を中心に，製造業や農業に従事する東南アジア（とくにベトナムとフィリピン）出身の外国人労働者が卓越。
技能実習生も多い。



（令和2年国勢調査および令和2年12月在留外国人統計により作成）

X県における在留外国人の概要

Ⅴ地域は外国人散在地域に該当。しかし一定数の在留外国人が暮らしている。

表1　在留外国人の国籍別割合

	外国人住民の総数（人）	全住民に占める割合（%）	国籍別割合（%）										
			中国	ベトナム	韓国	フィリピン	ブラジル	ネパール	インドネシア	米国	タイ	台湾	その他
日本	2,961,969	2.4	25.1	16.1	13.9	9.8	7.0	4.2	2.8	1.9	1.8	1.8	15.4
X県	約78,000	2.7	15.6	17.8	5.3	13.5	7.7	2.2	6.6	1.1	6.6	1.6	22.0
Ⅰ地域	約31,000	3.0	20.4	16.3	6.2	11.4	7.5	2.1	3.7	1.5	5.9	2.0	22.9
Ⅱ地域	約25,000	4.6	8.0	18.1	2.1	17.5	12.6	2.0	5.4	0.2	5.7	1.0	27.3
Ⅲ地域	約11,000	1.5	16.0	17.8	10.0	11.9	2.0	3.4	12.3	2.0	7.2	1.5	16.0
Ⅳ地域	約8,000	3.1	19.3	21.8	3.4	11.1	2.6	0.9	13.6	0.4	11.6	2.4	12.8
Ⅴ地域	約3,000	0.9	17.3	20.7	10.3	13.3	3.4	4.6	6.7	2.5	4.2	1.0	15.6
A市（Ⅴ地域）	約1,600	0.9	22.9	17.8	12.6	15.9	1.5	3.2	2.2	2.5	4.4	1.3	15.7

出典：在留外国人統計2022年6月および住民基本台帳2022年4月1日

在留外国人7.3万人，外国人労働者4万人

製造業　39.0%
農業、林業　19.1%

Ⅰ・Ⅱ地域は外国人世帯が多く，同胞によるコミュニティが存在。

Ⅴ地域は外国人が散在。同胞による強固なコミュニティは存在しない。

地域格差の一例（多言語対応）

外国人への初期対応で重要なのが**「多言語対応」**と**「日本語支援」**。

Ⅴ地域は，多言語対応が遅れ気味である。

表　自治体HPでの多言語対応

	多言語*1対応(%)	やさしい日本語*2での表記(%)	対応言語数*3（平均値）
Ⅰ地域	92.9	22.2	13.5
Ⅱ地域	80.0	26.0	7.8
Ⅲ地域	66.7	44.0	7.0
Ⅳ地域	80.0	15.6	6.4
Ⅴ地域	16.7	44.4	4.3

（出典：2022年12月24日における各自治体HPより作成）

*1 英語，中国語（簡体，繁體），韓国語以外の言語。
ベトナム語，フィリピン語，インドネシア語など。
英語，中国語，韓国語はすべてのHPが対応済み。
*2 ふりがな機能を含める。
*3 英語，中国語，韓国語，やさしい日本語を含める。

Ⅱ地域に位置するB市のHP

多言語対応（+やさしい日本語表記）が充実している。

地域格差の一例（日本語教育）

Ｖ地域は，**日本語支援を必要とするの子どもへの支援が相対的に手薄**。

＊加配教員の基準は、1つの学校に付き要日本語支援児童生徒18名以上。
X県は10名前後で加配をつけている（全国的には手厚い支援）。
しかし，1校あたり1～2名しかいない散在地域での加配は難しい。

表　日本語指導教員による学習支援の地域格差

	外国にルーツのある子ども（人）*1	そのうち日本語支援が必要な子ども（人）	日本語指導対応教員数（人）	日本語指導を受けている子どもの割合（%）*2
Ⅰ地域	1,694	605	31	57.9
Ⅱ地域	1,475	823	35	74.6
Ⅲ地域	391	148	5	41.9
Ⅳ地域	190	74	4	43.2
Ⅴ地域	71	18	1	27.8

（出典：令和3年度　X県帰国及び外国人児童生徒等日本語指導対応教員加配校）

*1 外国人幼児児童生徒，帰国幼児児童生徒および日本国籍要日本語指導幼児児童生徒

*2 日本語指導を受けている子どもの数/日本語指導が必要な子どもの数

A市の事例

＊A市では、保健センターを中心に，健診で問題が認められた子どもたちに対して，手厚い支援をしている。
外国にルーツのある子どもたちに対しても同様である。

ただし，外国籍世帯は流動性が高いこともあり，保健センター単独での支援には限界があるとのことである。

3歳児健診データを基にした、子どもの健康と成育環境の関係

（上段：人、下段：%）

	総数	成育環境*1										
		母子・父子世帯	外国人世帯	予防接種漏れあり	テレビ2時間以上視聴	スマホ2時間以上視聴	癖や習慣で困る	母親ゆったりしていない	近所に親しい子育て世帯なし	配偶者非協力的	家族に喫煙者あり	家庭環境に問題あり
全体	1,055	74	13	79	984	456	294	114	126	192	168	42
		7.0%	1.2%	7.5%	93.3%	43.2%	27.9%	10.8%	11.9%	18.2%	15.9%	4.0%
母子・父子世帯	74		1	7	68	40	30	13	17	74	12	10
	7.0%		1.4%	9.5%	91.9%	54.1%	40.5%	17.6%	23.0%	100.0%	16.2%	13.5%
外国人世帯*2	13	1		6	13	9	1	5	5	4	2	3
	1.2%	7.7%		46.2%	100.0%	69.2%	7.7%	38.5%	38.5%	30.8%	15.4%	23.1%
世帯主が非会社員*3	5	1		4	5	4	1	2	2	3	0	2
	0.4%	20.0%		80.0%	100.0%	80.0%	20.0%	40.0%	40.0%	60.0%	0.0%	40.0%

	総数	食生活*4		健康状態*4				発達上の問題*4	
		おやつ等に関する指導	食事全般に関する指導	病気あり*4	う蝕あり	肥満	やせ	言語発達の遅れ	社会性の問題*5
全体	1,055	107	123	64	152	28	223	72	104
		10.1%	11.7%	6.1%	14.4%	2.7%	21.1%	6.8%	9.9%
母子・父子世帯	74	8	9	1	19	3	12	5	12
	7.0%	10.8%	12.2%	1.4%	25.7%	4.1%	16.2%	6.8%	16.2%
外国人世帯*2	13	1	0	4	3	0	1	1	1
	1.2%	7.7%	0.0%	30.8%	23.1%	0.0%	7.7%	7.7%	7.7%
世帯主が非会社員*3	5	1	0	2	3	0	1	1	0
	0.4%	20.0%	0.0%	40.0%	60.0%	0.0%	20.0%	20.0%	0.0%

＊幼児期の「う蝕」は、成育環境（生活習慣，歯磨きなど）と強い相関関係。
＊幼児期の「う蝕」は、全体的には減少傾向にあるが，低所得層世帯では増加。

「う蝕あり」を被説明変数としたロジスティック回帰分析

表5　相関分析

	う蝕あり	予防接種漏れあり	外国籍	母子・父子世帯	TVビデオ2時間以上視聴	スマホ2時間以上視聴	癖や習慣で困る	母親ゆったりしていない	近所に親しい子育て世帯なし	配偶者非協力的
う蝕あり	1.000									
予防接種漏れあり	.119	1.000								
外国人世帯	.028	.164	1.000							
母子・父子世帯	.088	.021	.003	1.000						
TVビデオ2時間以上視聴	-.018	-.037	.030	-.014	1.000					
スマホ2時間以上視聴	.201	.120	.082	.055	-.088	1.000				
癖や習慣で困る	.004	.008	-.050	.078	.034	-.016	1.000			
母親ゆったりしていない	-.021	.017	.100	.060	-.051	.052	.070	1.000		
近所に親しい子育て世帯なし	.049	.017	.091	.094	.030	.063	.013	.154	1.000	
配偶者非協力的	.079	.006	.036	.477	-.048	.054	.041	.192	.122	1.000

表6　ロジスティック回帰分析（育児における社会的資源モデル）

変数名	う蝕あり	95%下限	95%上限	VIF
外国人世帯	1.780	0.503	6.302	1.020
母子・父子世帯	1.681	0.904	3.127	1.305
癖や習慣で困る	1.008	0.683	1.486	1.014
母親ゆったりしていない	0.656	0.353	1.221	1.072
近所に親しい子育て世帯なし	1.389	0.850	2.269	1.042
配偶者非協力的	1.439	0.900	2.301	1.346
R^2	.014			

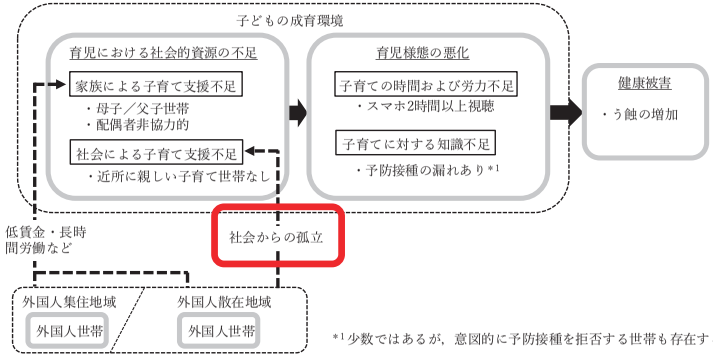
表7　ロジスティック回帰分析（育児における社会的資源モデル+育児様態モデル）

変数名	う蝕あり	95%下限	95%上限	VIF
外国人世帯	0.925	0.231	3.701	1.053
母子・父子世帯	1.558	0.840	2.890	1.307
予防接種漏れあり	2.269	1.331	3.866	1.042
TVビデオ2時間以上視聴	1.019	0.546	1.904	1.018
スマホ2時間以上視聴	3.087	2.119	4.496	1.034
癖や習慣で困る	1.035	0.699	1.533	1.016
母親ゆったりしていない	0.616	0.325	1.169	1.076
近所に親しい子育て世帯なし	1.327	0.822	2.145	1.046
配偶者非協力的	1.426	0.887	2.292	1.349
R^2	.063			

「育児における社会的資源の不足」→「育児様態の悪化」→「健康被害」

外国人散在地域では，同胞や行政からの支援が少ないため，育児担当者（主に母親）は集住地域よりも，孤立（育児の社会的支援不足）するリスクが高まる。
その結果，乳幼児の健康被害が拡大。

う蝕以外にも，一般的な健康被害（慢性的な疾患，その他）や発達の遅れを引き起こしている可能性も高い。



*1 少数ではあるが，意図的に予防接種を拒否する世帯も存在する。

小括

・外国人散在地域の子どもたちは**厳しい環境下**に置かれている。

・外部からの支援が重要。しかし，課題が多い。
行政関係者や各種支援団体，学校などによるネットワークの構築が必要。

参考文献

岩間信之ほか 2023.外国にルーツのある子どもたちの成育環境と健康被害に関する地理的研究
—外国人散在地域での事例研究—.E-journal GEO18（1）：170-185.

片岡博美2014.ブラジル人は「顔の見えない」存在なのか.地理学評論87（5）：367-385.

かながわ国際交流財団2016. 『外国人住民の子育て支援に関わる調査報告書』かながわ国際交流財団.

川添航2020.在留外国人の社会関係形成・維持における宗教施設の役割：茨城県南部におけるフィリピン人を事例に.
地理学評論93（3）：221-238.

川村千鶴子2008.『移民国家日本と多文化共生』明石書店

是川夕2018.移民に世代の教育達成に見る階層的地位の世代間変動.人口学研究54：19-42.

ジェームズ・J・ヘックマン著・古草 秀子訳 2015『幼児教育の経済学』東洋経済新報社.

田中宝紀2021.『海外ルーツの子どもへの支援－言葉・文化・制度を越えて共生へ』青弓社

田巻松雄2014.『地域のグローバル化にどのように向き合うか—外国人児童生徒教育問題を中心に—』下野新聞社

田代ほか2005. 2003年度長野県外国人検診受診者の健康状態と生活習慣. 長野県看護大学紀要７：41-50.

黒葛原ほか2011.外国人ADHD児の学習行動に関する分析.障害者教育・福祉学研究７：59-73.

中堀ほか2016. 子どもの食行動・生活習慣・健康と家庭環境との関連. 日本公衆衛生雑誌63(4)：190-201.

野元弘幸2006.外国人の子どもたちの排除の構造と対抗的教育実践の原理. 日本社会教育学会編『社会的排除と社会教育』

福本拓2010.東京および大阪における在日外国人の空間的セグリゲーション.地理学評論83A：288-313.

第１報告

外国人児童生徒教育における地域間格差の転換を目指して
―茨城県全域を対象としたオンライン日本語支援プロジェクト―

筑波大学 人文社会系　澤田　浩子

近年、外国にルーツのある子どもたちへの教育を保障し推進する制度の整備が進められています。茨城県には現在、3,000人を超える外国人児童生徒が公立の小中学校に在籍していますが、その半数超の1,600人が「日本語指導が必要な児童生徒」となっています。しかしその多くは、つくば市、常総市、土浦市、古河市などの県南・県西地域に偏っており、そのほかの地域は、いわゆる外国人住民の散在地域となっています。しかし、こうした散在地域にこそ、公的な支援が行き渡らず、課題が多いこともよく知られているところです。

そこで、茨城県教育委員会では2019年から「グローバル・サポート事業」を開始し、NPOによる日本語支援員や通訳の派遣事業のほか、筑波大学では学生日本語サポーターによるオンライン日本語支援事業を開始しました。このオンライン日本語学習支援事業は、日本語指導担当の加配教員が配置されていない中学校を対象とし、散在地域へ支援を届けることをねらいとしています。2020年にモデル事業として2校9名の生徒からスタートしましたが、2022年には全県事業化し、2023年には21校41名まで拡大しました。習熟度別に1クラス3～4名の少人数でクラス編成し、週2～3回の取り出し指導を行います。大学生サポーターが支援員としてオンラインで参加し、中学校の先生と連携して子どもたちに日本語学習支援を行います。

散在地域に住む子どもたちにとっては、他の地域の学校に通っている外国にルーツのある子どもたちとも知り合い、年間を通した活動の中で仲間を作っていく場になります。また、大学と中学校とが連携をすることで、大学生にとっては、教育現場の現状を知りながら実践の中で学び、これからの学校教育に必要な日本語指導のあり方を考えていく人材育成の場となっています。また学校現場にとっては、大学生と一緒に日本語アセスメントの実施・評価の方法や、日本語指導の重要性や方法などを共に学んでいただく機会となっているように思います。

その一方で、多くの中学校との学習支援をオンライン上でスムーズに実施するためには、生徒の情報共有や時間割の編成、日々の連絡業務など煩雑なことも増えてきます。より多くの子どもたちに支援を届けるためには事業規模の拡大が必須ですが、そのためには、運営のシステム作りや、日本語サポーターの募集、支援スキルの維持向上のための研修づくりが課題です。日本の学校文化や社会への同化を求めるのではなく、複言語主義に基づく日本語学習支援を今後どのように日本の公教育の中で実現していくのか、これからも子どもたち、学生たち、地域の先生方と考え、実践していきたいと思います。

シンポジウム「外国にルーツのある子どもたちと「共に生きよう」」

2023年7月1日（土）
茨城キリスト教大学8号館大講義室

外国人児童生徒教育における地域間格差の転換を目指して

― 茨城県全域を対象としたオンライン日本語支援プロジェクト ―

筑波大学 University of Tsukuba
澤田 浩子（筑波大学・人文社会系）
sawada.hiroko.gb@u.tsukuba.ac.jp

TOPIC

2

1 外国人児童生徒教育をめぐって
2 茨城県グローバル・サポート事業
3 広域教育事業の目指すところと課題
4 多文化共生社会に向けた広域教育事業とは

外国人児童生徒教育をめぐる近年の動き

3

2014.4
小中学校での日本語指導に**特別の教育課程制度導入**

2017.3
小学校/中学校**学習指導要領**に外国人児童生徒の指導について明記

2018.3
文化庁審議会国語分科会から**日本語教育人材の養成・研修**の在り方に関する指針

2019.6
「日本語教育の推進に関する法律」公布、施行

2023.4
高等学校での日本語指導に特別の教育課程制度導入

教育課程
280単位時間までの「取り出し日本語指導」が正規の教育課程に

教員配置
日本語指導を担当する教員の安定的な確保
日本語指導の必要な児童生徒18人に1人

人材育成
外国人児童生徒を含めた日本語教育人材の育成

実施主体
国・地方公共団体の責務を明文化

茨城県の在留外国人・外国人児童生徒数

出入国在留管理庁「在留外国人統計」（令和4年6月末）
茨城県政策企画部統計課「茨城の学校統計」（令和4年5月1日）

4

	在留外国人数（人）	構成比	総人口比
1. つくば市	11,490	14.8%	4.6%
2. 常総市	6,080	7.8%	10.1%
3. 土浦市	4,728	6.1%	3.3%
4. 古河市	4,159	5.3%	3.0%
5. 水戸市	3,741	4.8%	1.4%
6. 筑西市	3,163	3.2%	3.1%
7. 鉾田市	3,115	4.2%	6.9%
県北地域	・・・		
16. 日立市	1,551	2.0%	0.9%
32. 北茨城市	506	0.7%	1.2%
37. 常陸大宮市	356	0.5%	0.9%
40. 高萩市	234	0.3%	0.9%
41. 常陸太田市	215	0.3%	0.5%
44. 大子町	107	0.1%	0.7%
計	72,826	100%	

	小中学校の外国人児童生徒数（人）	構成比	総児童生徒数比
1. つくば市	477	15.3%	2.9%
2. 常総市	435	13.9%	9.9%
3. 土浦市	268	8.8%	2.8%
4. 古河市	220	7.1%	2.2%
5. 坂東市	156	5.0%	4.2%
6. 筑西市	151	4.8%	2.1%
7. 結城市	135	4.3%	3.5%
県北地域	・・・		
19. 日立市	44	1.4%	0.4%
40. 北茨城市	5	0.2%	0.2%
41. 高萩市	3	0.1%	0.2%
42. 大子町	3	0.1%	0.4%
43. 常陸太田市	2	0.1%	0.1%
44. 常陸大宮市	1	0	0.3%
	3,120	100%	

日本語指導が必要な児童生徒数
約 1,600人

散在地域の支援強化・小中高一貫した支援体制　5

小学校・中学校

加配教員の配置

国際交流協会・ボランティア団体による支援員巡回

茨城県　グローバル・サポート事業

R1
茨城NPOセンターコモンズ
・日本語支援員派遣（小学校）
・通訳派遣
・文書翻訳　など

R2
筑波大学
・オンライン日本語支援（中学校）

高等学校

外国人生徒特例入学者選抜枠
・各校2名以上の定員枠
・在日期間3年以内

県立高校改革プラン(外国人生徒支援)

R4
・結城第一高校、石下紫峰高校
・各校 1学年 40名定員
・在日年数制限なし

無支援の子どもをゼロに！　6

茨城県グローバル・サポート事業
オンライン日本語支援（筑波大学委託）

学生による**日本語サポーター**が
オンラインで
外国ルーツの子どもとつながって
日本語学習支援を行うプロジェクト

実証研究 開始

2市町村
2校9名

3市町村
6校27名

全県対象事業化

12市町村
19校48名

15市町村
21校41名

R2　R3　R4　R5（2023.6.30現在）

*日本語指導担当の加配教員が配置されていない学校、または
地域のボランティア等日本語支援員の支援を受けていない学校が対象

オンラインだからできる「個に応じたきめ細やかな指導」　7

- 1クラス **生徒3～4名**の**習熟度別クラス**
- 1回50分 週2～3回の取り出し型指導
- サポーター **学生2～3人**の **Team Teaching**
- 5～2月の年間30週「特別の教育課程」

▼ 2023年度　春期時間割

	月	火	水	木	金
1		A-2	A-2	B-1 B-3 D-1	
2	D-1	A-3 A-4 C-2	A-1	C-1	B-3
3	A-4	C-1	B-1 C-2 D-1	A-1	
4				B-2 B-4	A-3
5			A-3		
6			B-2 B-4		

11クラス 41名

A：4クラス 16名
B：4クラス 12名
C：2クラス　8名
D：1クラス　5名

▲ オンライン日本語クラスの様子

▲ 中学校の日本語支援ルームから

オンラインだからできる「仲間との学び」　8

▲ 7月 夏休み勉強会
（各生徒の自宅から）

▲ 8月 ワンデイキャブ
（つくば ゆかりの里）

▲ 2月 オンライン修了式「みんなの会」

中学校と大学が連携することでできること

9

● 現場支援と人材育成の循環

大学：実践の中で学び、課題解決する力
学校：教育現場の緩やかな変革

▲ 支援状況の共有・支援ルームの見学

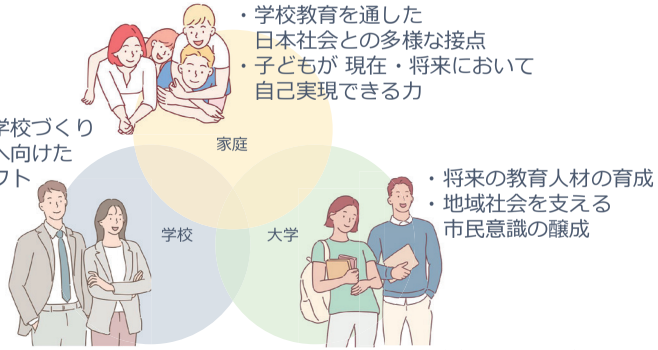
▲ 学生・学校教員によるアセスメントの実践

▲ 保護者からの聞き取り・進路ワークショップ

▲ サポーター募集（年2回）とサポーター研修の様子

広域の教育事業が目指すところ

10



c.f. 大学と地域が連携した仕組みづくり
→ 川口(2017, 2020)、衣川(2021)
小池・古川(2019)、横溝(2016)

目指すところと、4年目の課題

11

目指すところ

- ✓ 地域格差のない教育プラットフォーム
- ✓ 学校・地域を超えた
  ヴァーチャルな「居場所」
- ✓ 行政による県単位での教育の質保障
- ✓ 現場支援と人材育成が循環する仕組み

課題

- ✓ 地域による温度差（顕在化されないニーズ）
- ✓ オンラインによる**システム構築の煩雑さ**
  ・時間割編成、出欠確認、通信トラブル
- ✓ 研修による**サポーターの質**の維持と向上
- ✓ **「顔の見える」信頼関係**の難しさ

➢ 広域事業のメリットが最大限活かされる、適正規模の模索
➢ 持続可能な事業としての、必要な人員・予算規模
➢ 事業の目指すべきところの明確化

多文化共生社会へ向けて、私たちが考えなければいけないこと

12

複言語主義と公教育のジレンマ
同化？統合？包摂？
Council of Europe (2007)

教育支援の充実と管理社会のジレンマ
合理的配慮/教育的介入
特別扱いするということ

文化的多様性と“正しさ”のジレンマ
物質的世界観
ジェンダー
“平和主義”

経験学習理論
- 学習は**「経験の理解」と「経験の変換」**を通して「知識」が造られる過程
- 「経験の理解」と「経験の変換」の促進には適正な**内省的省察（リフレクション）が重要**

(Eyler & Giles 1999, 唐木2010)

言及文献

13

- 川口直巳（2017）「文化の違う学校間交流からの学び―愛知教育大学とブラジル人学校との交流から―」『愛知教育大学研究報告人文・社会科学編』66、p.31-38
- 川口直巳 (2020)「愛知教育大学における学生の育成を中心とした外国人児童生徒支援―この10年の変遷から―」『外国籍児童生徒の就学義務をめぐって』4、15-23.
- 唐木清志 (2010)『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』東京：東信堂.
- 衣川隆生 (2021)「地域の活性化と外国人の自立を目指した地域日本語教育の体制づくり―とよた日本語学習支援システムの事例―」『日本語教育』178、36-50.
- 小池亜子・古川敦子 (2019)「外国人児童生徒等の日本語指導に関するボトムアップ型教員研修―群馬県伊勢崎市の教員研修を事例として―」『日本語教育』172、88-101.
- 嶋田和子 (2014)「定住外国人に対する縦断調査で見えてきたこと―OPIを通して『自らの声を発すること』をめざす―」『日本語プロフィシェンシー研究』2、30-49.
- 横溝環 (2016)「大洗町の多文化共生に向けた活動における成果と課題―拡張的学習を枠組みとして―」茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』20、173-196.
- 文部科学省（2019）『外国人児童生徒受入れの手引』https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm
- 文部科学省（2022）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果報告書」https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569_00004.htm
- Council of Europe （2001） *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment.* Cambridge: Cambridge University Press
- Eyler J. & Giles D. E. Jr. (1999) *Where's the Learning in Service-Learning?*, Jossey-Bass Publishers

資料1　日本の学校教育における外国人児童生徒受入の立場

14

▶ **日本国憲法：教育における権利と義務**

第三章　国民の権利及び義務

第26条　すべて**国民**は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける**権利**を有する。

2　すべて**国民**は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる**義務**を負ふ。

義務教育は、これを無償とする。

▶ **教育基本法：教育の目的と理念**

第一章　教育の目的及び理念

第一条（教育の目的）　教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な**国民**の育成を期して行われなければならない。

第四条（教育の機会均等）すべて**国民**は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならず、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、**教育上差別されない**。

▶ **経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約**（1979年批准）

第十三条１　この規約の締約国は、教育についての**すべての者の権利**を認める。

2　この規約の締約国は、１の権利の完全な実現を達成するため、次のことを認める。

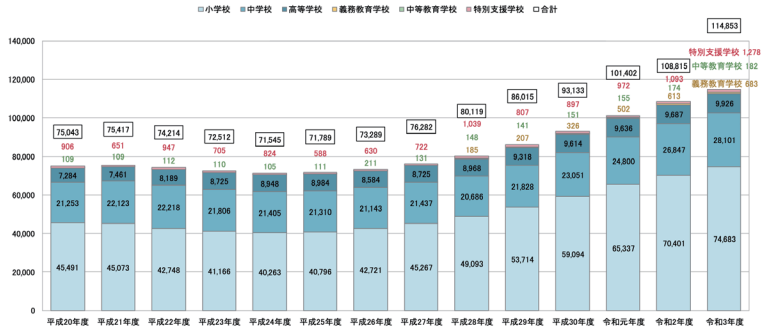
(a)　初等教育は、**義務的**なものとし、すべての者に対して**無償**のものとすること。

資料2-1　日本の学校教育における受け入れの現状

15

文部科学省『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について（令和3年度）』

図1　公立学校に在籍している外国籍の児童生徒数（出典：文部科学省「学校基本調査」）



資料2-2　日本の学校教育における受け入れの現状

16

図2　日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数

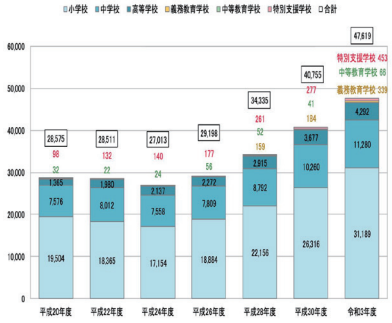
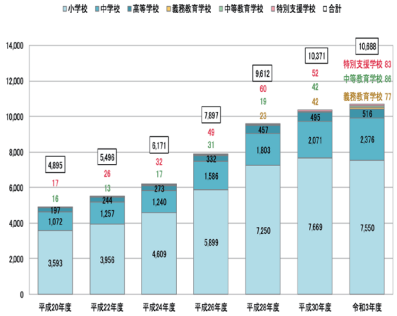
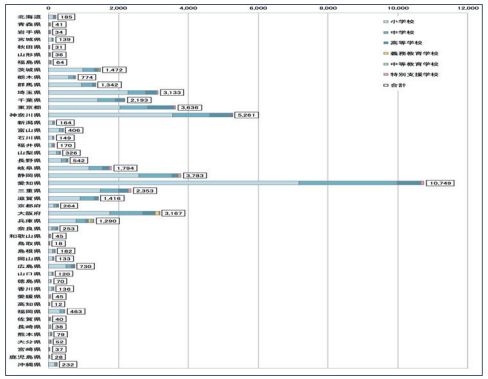


図3　日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数



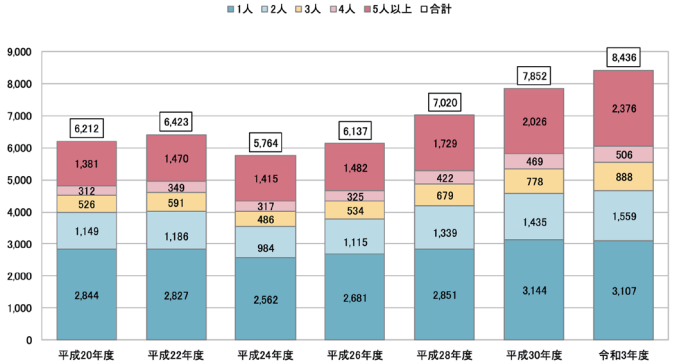
資料2-3　日本の学校教育における受け入れの現状　17

図4　都道府県別　日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の在籍人数（令和3年度）



資料2-4　日本の学校教育における受け入れの現状　18

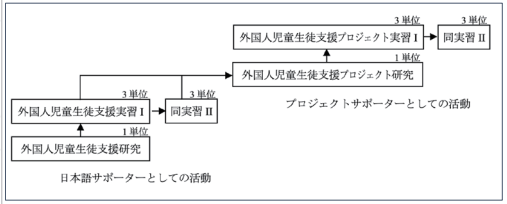
図5　公立小・中学校に日本語指導が必要な児童生徒が在籍する学校数



資料3-1　グローバル・サポート事業
日本語サポーター研修カリキュラム（筑波大学）　19

表 1　日本語教師養成のカリキュラム（一部）

学術科目群	
言語	日本語の音声・音韻 日本語の語彙 日本語の文法 I～IV
言語と社会	日本語の語用論 日本語の談話
言語と心理	第二言語習得論 日本語教育心理学 異文化間心理学 外国人児童生徒教育論 外国人児童生徒支援研究* 同　プロジェクト研究*
言語と教育	日本語教育文法論 日本語技能指導論
社会・文化・地域	多文化の中の日本 海外の日本語教育と日本学
実習科目群	日本語教育実習 日本語教育国際研修 日本語教育インターンシップ 外国人児童生徒支援実習* 同　プロジェクト実習*



資料3-2　グローバル・サポート事業
日本語サポーター数（学類別内訳）　20

	第1期 2020.10～		第2期 2021.04～		第3期 2021.10～		第4期 2022.4～		第5期 2022.9～		合計	
	研修	実習	研修	実習	研修	実習	研修	実習	研修	実習	研修	実習
人文学類	1	1	2	1					2	1	5	3
比較文化学類					1		1	2			2	2
日本語・日本文化学類	19	10	5	4	14	7	3	4	12	7	53	32
国際総合学類			3	2	1	1	4	4	4	1	12	8
教育学類	2	2	3	1	1		2	1	1	1	9	5
心理学類							2		1		3	
障害科学類	3	1		1			1				4	2
生物資源学類							1	1	3	1	4	2
情報メディア創成学類							1				1	
社会工学類			1								1	
知識情報・図書館学類							1				1	
芸術専門学群							3	2			3	2
医学部看護学類							2		3	1	5	1
総合学域群							2				2	
大学院				1					2	2	2	3
他大学					茨キリ 2	茨キリ 2			茨キリ 2 上智 1 東洋 1 ICU 1	茨キリ 2 上智 1 東洋 1	7	6
合計	25	14	14	10	19	10	23	14	33	18	114	66

第２報告

外国にルーツのある子育て世帯への支援と子育て支援室アンネローゼ・IC with Uプロジェクトの今後の展開
―県北での支援体制づくりを目指して―

茨城キリスト教大学 文学部 児童教育学科　中島　美那子

１．IC with Uプロジェクト

IC with Uプロジェクトは、学科を横断した教員たちが手を携えて、2021年度より始めたプロジェクトです。現代英語学科、文化交流学科、児童教育学科そして心理福祉学科それぞれの学科に受講すべき科目が用意されており、本学の全学部学科の学生はそれらの講義や演習科目を修了することで、「多文化協働クリエイター」の認定証を得ることができます。

「多文化協働クリエイター」に認定された学生は、多文化共生の知識や技術が身に付くことになりますので、卒業後も職場や地域社会の中で活躍してくれることと思います。

このように、本学では外国にルーツのある子どもさんやそのご家族の支援に力を入れようとしています。しかし本学の特色の一つとも言える子育て支援の分野では、なかなか外国にルーツのあるご家族、子どもさんとの積極的な関わりに至っていないのが現実です。以下にその状況についてお話をします。

２．カウンセリング子育て支援センターでの取り組み

1）子育て支援・発達支援

2016年度より始まった本学の子育て支援・発達支援の取り組みは、今年度で8年目を迎えます。その間、エビデンスのあるペアレンティング・プログラムを複数用意し、近隣地域の子育て中の保護者に提供したり、小学校低学年の子どもさん向けの夏休み講座を開催したりして、「茨キリ」ならではの子育て支援を行っています。

また2020年度からは日立市から委託を受け、市内保育園などの巡回相談を本学教員8名で行っています。この巡回相談では時に支援の対象者が外国にルーツのある子どもさんであったりしますが、それでも大いに貢献しているとは言い難いのが現状です。

2）親子教室「クローバー」を通した支援の構想

この5年間は、半年（全14回）をかけて発達支援の親子教室「クローバー」を開催しています。これは心理士である私や兼任講師、保育士、学生でチームを組んで行っています。また毎回、地域の専門機関からの見学もあり、クローバーを通した他機関との連携が整いつつあります。

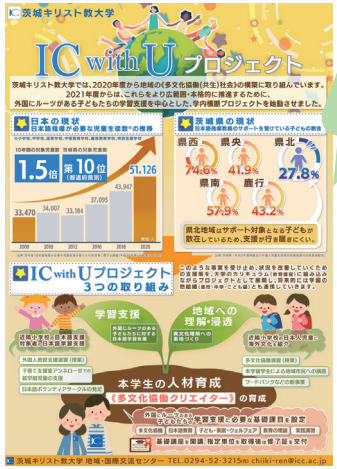
そこで、まずは取りかかりとして「クローバー」を通して外国にルーツのある子どもさんとそのご家族が、日本人の親子と共に本学の子育て支援・発達支援を当たり前に使う仕組みを作りたいと構想しているところです。

本学は、地域の「子育て」や「子育ち」を支える人的資源に富んでいます。ぜひその点を活かし、地域との連携のもとに外国にルーツのある子どもさんやそのご家族の支援を進めていきたいと思っています。

2023.07.01

外国にルーツのある子育て世帯への支援と子育て支援室アンネローゼ・IC with U プロジェクトの今後の展開

茨城キリスト教大学文学部児童教育学科
中島美那子



多文化協働クリエイターの育成

1．IC with U プロジェクト

- 学科横断的な取り組み
  - 現代英語学科
  - 文化交流学科
  - 児童教育学科
  - 心理福祉学科
- 文化交流学科の科目が多いが他学科の学生も履修可
- 中島も「子育て支援論」、「地域子育て支援実践演習」で、少しだけ貢献。

2．カウンセリング子育て支援センターでの取り組み

年間を通じて、さまざまな子育て支援事業を行う。
特に、効果の実証されている親支援プログラムの講座と、発達支援が特徴。

日立市と協働した市内保育園等の巡回支援

2020年度に日立市の業務委託を受け、カウンセリング子育て支援センター子育て支援室では日立市の保育園等の巡回を行う巡回支援専門員整備事業を実施しています。

本学大学教員8名で担当

1人につき１～3園を担当

1園につき年間3回（3時間）訪問

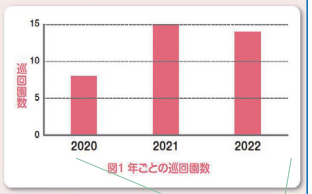


図1 年ごとの巡回園数

担任の先生などから、子どもさんへの関わり方のアドバイスを求められる。
その際、外国にルーツのある子どもさんのケースのこともある。

カウンセリング研究室

開室時間
月～金　9時～16時半
※土・日曜日、祝未明祭、大学休講日はお休みです。
また、大学の長期休暇期間は特別日程となります。
ご有益の方は、直接、カウンセリング研究室にお問い合わせください。

申込方法
予約制です。電話でお申し込みください。
TEL.0294-52-3215(内線 3280)

料　金
初回面接 4,000円
個別面接 2,000円～5,000円
家族面接 5,000円
心理検査 1,000円～5,000円
*健康保険の適用はありません。
*本学園の学生・生徒は無料です。
*公認心理師養成課程の大学院生が同席あるいは担当することもあります。
*医療機関を受診されている方は、主治医とご相談の上、お申し込みください。

アクセス

相談までの流れ

お電話でのお申し込み
TEL.0294-52-3215（代表）

↓

まず、お電話で簡単にお話をうかがいます。
面接事項がありますので、
10～20分ほどお時間をいただきます。

↓

初回面接の日時調整

↓

担当のカウンセラーによる初回面接を行います。
大学院生が同席させていただく場合があります。

↓

当室にてお受けする場合
担当者決定

当室にてお受けできない場合
他機関への紹介

個別の
発達相談、および
発達検査も実施

子育て支援講座　子育て支援室「アンネローゼ」主催講座

昨年度の例から

❶前向き子育てプログラム　トリプルP

日時：2022年5月20日(金)～7月8日(金)
午前10時～12時　全8回
担当：菅野 ひろみ（本学兼任講師）
お子さんへのかかわり方について理論と技術の両面から楽しく学びます。

参加者の声
- 子育てをしていくうえで子どもの問題行動への対処法やなぜそうなるかなどとても勉強になってよかった。
- 現実的な期待を持つことで私自身のイライラが減り、子どもとの関係が今までより良くなった。

② ワーキングマザー講座

日時・担当：
2022年11月8日(火)
萱場 晶子（NPNC認定ファシリテーター・児童指導員）
11月15日(火)、11月22日(火)
村田 孝二（NPO法人学修デザイナー協会前理事長）
11月29日(火)
髙村 浩子（ファイナンシャルプランナー）
午前10時～12時　全4回
講師や参加者と共に、将来や家計について考えます。

参加者の声
- マインドマップで自分の中でモヤモヤしていた頭がスッキリしました。家計管理については将来の具体的なイメージが出来るようになり、良かったです。
- 仕事復帰してからも使える知識を学ぶことが出来たので、仕事復帰に希望がみえてきました。
- 考え方のヒントや他のママさんの実践例や工夫が分かり、実りのあるものとなりました。

③ 完璧な親なんていない（NP）プログラム

日時：2022年9月26日(月)～10月31日(月)
午前10時～12時　全6回
担当：萱場 晶子
（NPNC認定ファシリテーター・児童指導員）
ファシリテーターのもとでお子さんと離れて、子育てについてゆっくり語り合います。

参加者の声
- とても楽しくて、2時間があっという間でした。また参加したいです。
- 同世代のお子さんを持つ親御さんたちのお話を聞けて自分だけじゃないと思えるのが良かったです。

❹スター・ペアレンティング・プログラム

日時：2022年11月28日(月)～2023年1月23日(月)
午前10時～12時　全4回
担当：中島 美那子 (児童教育学科教員)
親としてぶつかる問題のさまざまな解決方法について考えます。

参加者の声

- 一人ひとりの意見を尊重して下さっていてリラックスしてプログラムに参加できました。
- 2～4人グループの少人数で話しやすかった。
- 他の参加者の方のアイデアを知れて生活に取り入れられた。受講者がわかるところまで噛み砕いてくれた。例や説明がわかりやすかった。

❺プレイグループ「クローバー」

日時：2022年10月14日(金)～2023年2月10日(金)
午前10時～12時　全14回
担当：中島 美那子 (児童教育学科教員)
管野 ひろみ (本学兼任講師)
かかわり方や育て方に工夫の必要なお子さんとその保護者向けの親子教室です。

参加者の声

- 終了して何よりも大きく変わったのは、子どもではなく親である自分自身でした。子どもとのかかわりに余裕が持てるようになりました。
- 毎回、子どもが参加を楽しみにしてました。
- 参加者みなさんのがんばりに刺激を受けました。

地域・国際交流センターとの共催講座

❻夏休み子どもアンネローゼ

日時・担当：
2022年8月8日(月)
佐々木隆宏 (児童教育学科教員)
穂積　訓 (児童教育学科教員)
9日(火)
中山 健一 (文化交流学科教員)
小西 優子 (食物健康科学科教員)
10日(水)
髙橋 和将 (児童教育学科教員)
午前9時30分～午後12時45分　全3回
日替わりのテーマを通して、大学教員、保育士、学生と一緒の時間を過ごす、小学生向けの講座です。

参加した小学生の保護者の声

- 「3日間、毎日すべてのプログラムが楽しかった。つまらなかった時間なんて全然無かった」と話してくれました。
- 「全ての講座どれもとても楽しかった」と話してくれました。その中でも留学生との交流が1番楽しかったとの事です。

❼アンネローゼ広場

日時・担当：
2022年5月17日(火)
清水 悦子 (児童教育学科教員)
6月7日(火)
原口なおみ (児童教育学科教員)
10月18日(火)
若林千津子 (看護学科教員)
10月27日(木)
菅野ひろみ (本学兼任講師)
午前10時～12時　全4回
それぞれの大学教員の専門をもとに、テーマに沿っておしゃべりします。

参加者の声

- 口の周りの筋肉を鍛える遊びや子どもの興味の逸らし方を具体的に知ることができた点がよかった。
- 言葉掛けについてとても参考になりました。特にメディア漬けが良くないが、ストレスを溜めながら家事も進まないよりは上手く活用出来たら良いなど、ママ達の気持ちに寄り添った解答がとても良かったです。

3．外国にルーツのある子どもへの発達支援、家族支援の必要性

- 安定しない生活基盤の影響？
- 文化の違いからくる誤解？
- 言語の壁や文化の壁？

さまざまな要因が絡み合い、発達への支援を要する外国にルーツのある子どもの割合は、決して低くはない。

そのような状況に効果的なプログラム→クローバー

2023 年度

プレイグループ「クローバー」

プレイグループ「クローバー」は…

「子育てが大変！」と感じている保護者の方、
おすこんの発達が気になっている
保護者の方向けの親子教室です。
本学教員、保育士、学生が、
おすこんの発達を促す活動に取り組みます。

いつ？
10月～2月の金曜日
10:00～12:00　（全14回）
このほかに個別の発達相談の時間が2回あります！（約90～90分）

どこで？
茨城キリスト教大学
子育て支援施設「アンネローゼ」
お子さんたちは、グループでの活動や
一人ひとりに合わせた内容で活動を行います。

その他、詳しいことは裏面をご覧ください

申し込み・問い合わせ
茨城キリスト教大学　カウンセリング子育て支援センター
TEL：(029)-52-2515(代表)
〒319-1295 日立市大みか町5-11-1 JR常磐線大甕駅西口徒歩5分
※お問い合わせは平日9:00～16:30ですが、担当者が不在のことがありますのでご了解ください。

2023 年度　プレイグループ「クローバー」

日時　10月～2月の金曜日 10：00～12：00（全14回＋）
＋14回の合間に発達確認の個別の時間があります（約50～80分）。

回	月日	内容	スタッフ
前	個別に設定	発達の状況確認	大学教員
1	10/13	プレイグループ（子ども）と保護者グループにわかれて活動します。 【プレイグループ（子ども）】 お子さんたちは1人ひとりに合わせた発達をうながす集団および個別活動を行います。 【保護者グループ】 保護者の方々は、日常で子どもの発達や子どもとのかかわり方について学びます。ペアレンティング・プログラム「前向き子育てトリプルP」を用います。 知識を得るだけでなく、仲間つくりのための場でもあります。	【プレイグループ】 大学教員・心理士・保育士・学生 【保護者グループ】 大学教員
2	10/20		
3	10/27		
4	11/10		
5	11/17		
6	11/24		
7	12/1		
8	12/8		
9	12/15		
10	12/22		
11	1/19		
12	1/26		
13	2/9		
14	2/16		
後	個別に設定	発達の状況確認	大学教員

場所　茨城キリスト教大学　子育て支援施設「アンネローゼ」
対象児　2歳以上4歳くらいまで（8組限定）
料金　講座14回　14,000円（1回あたり1,000円）
個別の発達確認2回　4,000円（1回あたり2,000円）
テキスト代　3,000円
毎月最初の講座日に当月分を徴収します。途中お休みでも返金はできません。

申込方法　anne@icc.ac.jp へ、メールでお申し込みください。
件名：「クローバー希望」
本文：下記の内容を記載してください。
①保護者氏名（ふりがな）　②住所　③電話番号　④メールアドレス
⑤お子さんの名前【ふりがな、性別、生年月日】
※記載された個人情報は、本講座に関係することのみに使用します。

研究機関（大学）の事業のため、研究へのご協力をお願いする場合があります。ただし、強制ではありません。

前向き子育てトリプルP
（Positive Parenting Program）

- オーストラリアのクィーンズランド大学で開発されたプログラム。オーストラリアでは、国や州単位での取り組みがされている。
- 世界中でその効果が証明され、広く実施されているプログラム。
- 日本でも、子どもにかかわる上での実践的で即効性のあるプログラムとして、保護者グループでの８回講座が開催されている。他にもセミナー形式、3回講座などもある。

トリプルPの考え方・技法

子どもの行動が問題行動となる理由

- 生まれついての行動の特徴
- 伝わった情報に反応して起こる行動
- 気分や体調の影響

14

伝わった情報に反応して起こる行動

（1）指示の仕方による問題行動

- 多すぎる指示
- 難しすぎる指示
- あいまいな指示
- あいまいなボディ・ランゲージ

15

（2）おとなの反応を見て起きる問題行動

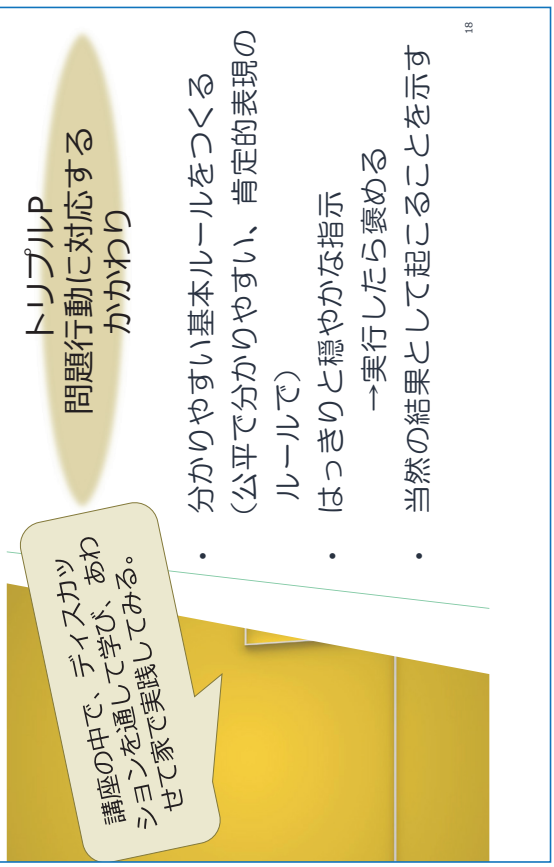
- 間違って与える褒美
- 好ましい行動の無視
- 脅すだけで実行しない

16

トリプルP
子どもの発達を促す かかわり

- 子どもに注目している気持ちを伝える
- 良い手本を示す
- アスク・セイ・ドゥ
- 具体的にほめる

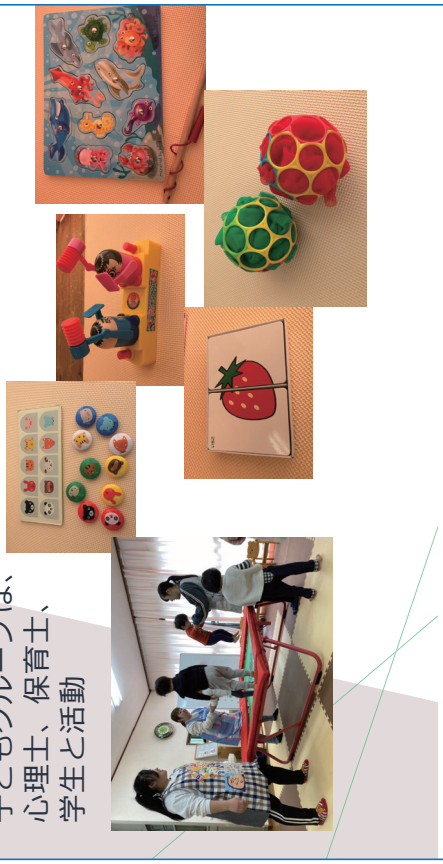
17



トリプルP
問題行動に対応する かかわり

- 分かりやすい基本ルールをつくる（公平で分かりやすい、肯定的表現のルールで）
- はっきりと穏やかな指示
  →実行したら褒める
- 当然の結果として起こることを示す

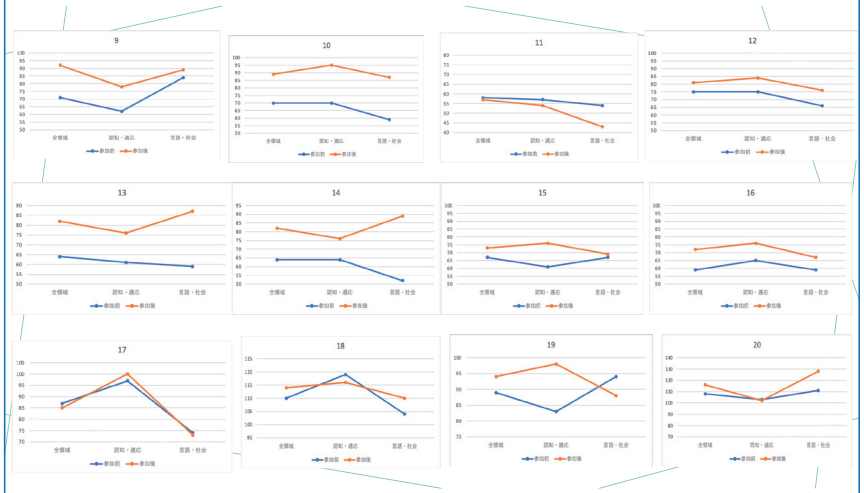
18



子どもグループは、心理士、保育士、学生と活動

これまでのクローバー参加者（20名）の新版K式発達検査の参加前後のスコア比較

（平均年齢：3歳6ヶ月）



クローバーを通した他機関との連携

昨年度までの例として、

- 参加者の募集に近隣保健センターの協力
- 保護者グループ、子どもグループそれぞれに対する他機関からの見学者
  （保健センタースタッフ、県の相談業務従事者、民間の児童発達支援事業所スタッフ、卒業生保育士など）

地域全体で、外国にルーツのある家族を丸ごと支える連携の実現へ

さいごに

本学の限界

- 有料という問題
  （巡回相談だけは公的補助があり、無料）
- 点で繋がっている問題

本学の利点

- 学生の存在（IC with U受講学生の存在）
- 永遠に続けようと思ってくれれば続く親子との関係性
- 外国にルーツのある子ども・家族に関する研究者（組織）

→ 面でつながる取り組みの必要性！

第３報告

外国にルーツのある子どもへの地域での日本語・学習支援を考える
―「にほんご水戸の部屋」の取り組みから―

常磐大学 人間科学部 コミュニケーション学科　飯野　令子

私は2022年3月より、水戸市国際交流センターで「にほんご水戸の部屋」（以下、水戸の部屋）というボランティア日本語教室を開いています。水戸市国際交流協会との共催で、週1回、夕方から夜にかけての時間帯です。

水戸の部屋には、外国にルーツのある子ども、子どもの保護者や就労者など、幅広い年齢層が日本語学習に来ます。2023年4月から6月の間に参加した外国にルーツのある子どもは小学生から高校生まで計11名でした。子どもたちのルーツの国は、ネパール、タイ、中国、ベトナムなどです。支援者は私の他に、中核的な役割を果たす市民ボランティア6名と、日本語教育や英語教育を学ぶ大学生、留学生、日本語支援に興味を持つ中学生・高校生、支援者のお子さんの小学生なども参加します。外国人も日本人も子どもから大人まで多様な背景、年齢層の人がいます。

活動内容として、小学生は、漢字ドリル、計算ドリルなどの宿題をやり、支援者がそれをチェックしたり、学校の教科書を持って来て、支援者と内容を確認する子もいます。中学生は、学校の教科書やワークブックを持って来て、わからない部分を支援者と確認する子がいます。自分で教材を持ってこなければ、中学生のための、教科につながる日本語教材を支援者と一緒に取り組みます。小学生も中学生も、ある程度学習したら、支援者や他の子とおしゃべりしたり、折り紙やすごろく、カードゲームなどで一緒に遊んでいます。難しいのは高校生です。全日制高校に通い、理系クラスで大学進学を目指す子もいれば、定時制高校に通い、日本語での会話に大きな問題はなくても、教科学習にはついていけない子もいます。また、高校に入っていても、来日から日が浅く、日本語での会話にも困る子がいます。高校生は、教科学習が難しくても、せめて日本語だけでも一定レベルにしないと、その先がありません。しかし、子どもたち自身がその危機感を持っていないことが大きな課題です。

水戸の部屋の支援の課題として、①水戸の部屋までの交通手段、②保護者と連携した支援、③学校と連携した支援、④子ども本人の意欲・将来への動機づけ、が挙げられます。①については、オンライン支援の模索、②については送迎時の保護者への声掛けをしています。③については水戸の部屋に通う子がいる小学校へ、大学生がボランティアで支援に行っています。今後、中学校や高校へも支援を広げていきたいです。④については水戸の部屋の活動を、子どもが自分の将来に目を向けられるような内容とするため、ロールモデルとなる留学生にも関わってもらうようにしています。

最後に、水戸の部屋の意義として、多文化共生空間を創出していることが挙げられます。それによって、①子どもの将来を見据えた日本語・教科学習支援の場であること、②日本語・教科学習だけでなく、楽しく安心できる場、何かあったら相談できる場であること、③支援者が地域に住む外国にルーツのある人々を知り、多文化共生を体験する場であること、④多文化共生を地域全体に広げていく起点であること、が実現すると考えています。

外国にルーツのある子どもへの
地域での日本語・学習支援を考える
―「にほんご水戸の部屋」の取り組みから―

2023年7月１日（土）大学連携シンポジウム
茨城キリスト教大学8号館大講義室
飯野令子（常磐大学）
iino@tokiwa.ac.jp

内容

1.「にほんご水戸の部屋」開設までの経緯

2.「にほんご水戸の部屋」の活動内容

3.「にほんご水戸の部屋」の支援の課題と
　解決のための方策

4.「にほんご水戸の部屋」の意義

1．「にほんご水戸の部屋」開設までの経緯

茨城県内の日本語ボランティアさんとの交流

2015年4月～
　茨城県国際交流協会日本語教育アドバイザー
　県内各地で日本語ボランティア養成講座・
　　同ブラッシュアップ講座　講師を担当
2020年3月～
　水戸市の日本語ボランティア有志と
　Webサイト「茨城日本語ボランティアネットワーク」を運営
　ボランティア日本語教室向けの情報提供
　2，3か月に1度のオンライン交流会を実施

茨城日本語ボランティアネットワーク
https://ibarakinihongo.com/

外国人保護者からの声

・2022年初め、水戸市国際交流協会に、子どもに日本語を教えてくれる教室はないか、という問い合わせ。

水戸市国際交流センター（水戸市国際交流協会）

・火曜日から土曜日の午前に、曜日ごとに異なるボランティア団体の日本語教室が開かれている。
・日曜午前に子どもの日本語支援をするボランティア団体がある。
・私と水戸市国際交流協会が、成人向けの夜の日本語教室の開催を検討していた。

2022年3月「にほんご放課後の部屋」開始

毎週木曜　16:00～17:30

・子どもを送ってくる外国人保護者にも日本語支援をする。
・平日午前の教室の外国人参加者から、夜にも日本語学習がしたい、との要望があった。

2022年5月「にほんご夜の部屋」開始

毎週木曜　18:30～20:00

・中学生の子を持つ外国人保護者から、「にほんご放課後の部屋」に行かせたいが、部活があるため間に合わないとの連絡があった。
・「にほんご夜の部屋」に中学生、高校生も来るようになる。

・「にほんご放課後の部屋」と「にほんご夜の部屋」を合わせて「**にほんご水戸の部屋**」という。
・「にほんご水戸の部屋」は任意団体として、日本語教室を主催している。水戸市国際交流協会が共催。
・「放課後の部屋」の時間も「夜の部屋」の時間も、大人も子どもも参加している。

2．「にほんご水戸の部屋」の活動

外国にルーツのある子ども

【ルーツの国】
ネパール、中国、タイ、ベトナム、フィリピン　など

【学年と人数】2023年４月以降に参加した子ども
小学生　３名
中学生　２名
高校生　６名

支援者
【中核ボランティア】
一般市民：元小学校の先生、元企業の技術職の方、
留学経験があり外国語に堪能な方、
他の日本語教室での経験が豊富な方　など

【学生ボランティア（毎回入れ替わる）】
大学生：常磐大学・茨城大学で日本語教育・英語教育を学ぶ学生
外国人学生：常磐大学の交換留学生・外国人学生
高校生：常磐大学高校ほか
中学生：水戸市国際交流センターの近所に住む中学生
小学生：支援者のお子さん　など

活動内容：小学生・中学生

小学生：漢字ドリル、計算ドリルなどの宿題をやり、支援者がチェックする。学校の教科書を持って来て、支援者と内容を確認する子もいる。その後、支援者や他の子とおしゃべりしたり、折り紙やすごろく、カードゲームなどで一緒に遊ぶ。

中学生：学校の教科書（数学や理科）を自分で持って来て、わからない部分を支援者と確認する。持ってこなければ中学生のための日本語教材を支援者と一緒に取り組む。ある程度学習したら、支援者や他の子とその時々の話題でおしゃべりをする。

活動内容：高校生

・全日制高校に通い、大学進学を目指している子は、数学や化学などでわからないところを持って来て、支援者に質問する。高校の数学や化学が教えられる支援者が対応する。
・定時制高校に通い、日本語で日常的な会話はできるが、教科学習についていけない子には、日本語力をできるだけ向上させ、専門学校等に進学することを提案している。本人も納得しているが、学習自体にあまり熱心ではない。
・来日から日が浅く、日本語での日常会話も困難な子には、まずは日常生活を送るうえで必要な日本語に困らないように、支援している。水戸の部屋に来た時は意欲的だが、意欲の継続が難しい。

3.「にほんご水戸の部屋」の支援の課題と解決のための方策

学校の支援：

小・中学生：週4時間の日本語巡回指導
日本語指導学級（1校のみ）
高校生：特別な支援を受けていない
⇒大部分が現場の教員に任される

家庭環境：

保護者が夜、仕事に出る家庭が多い。
夜は1人で過ごしたり、子どもだけで過ごしている。

支援の課題：

①保護者が平日の夕方、水戸市国際交流センターまで子ども連れて来ることができなければ、参加できない。　**⇒オンライン支援の模索**

②保護者は仕事に追われ、子どもとすれ違いの生活をしている。保護者は子どもが日本で自立できることを願っているが、その実現を学校や支援者に託している　**⇒送迎時の保護者への声がけ**

③子どもたちは学校でどのような支援を受けているのか。子どもの学校での様子はどうなのか。学校との連携で、効果的な支援ができるのではないか。**⇒学校との連携（方策１）**

④保護者は子どもの日本語力や教科学習について心配し連れて来る。支援者も親身になって支援しているが、子どもは勉強したくない。
⇒子どもの意欲向上・将来への意識づけ（方策２）

方策１：学校との連携

①水戸の部屋に通う子どもの小学校1校に働きかけ、水戸の部屋メンバーの大学生が日本語ボランティアとして小学校に行くことを申し出る。
2022年度2～3月　週1回　学生3名と発表者
2023年度6月開始　学生3名（うち留学生1名）
一般市民（元小学校教員）1名

②別の小学校からも日本語ボランティアの依頼を受ける
現在調整中

③今後は中学校や高校へも、水戸の部屋のメンバーが日本語ボランティアとして行ける環境を作っていきたい。

方策２：子どもの意欲向上・将来への意識づけ

①水戸の部屋が、安心して楽しく勉強したり遊んだりできる場所だと感じてもらい、水戸の部屋に行きたい、と思ってもらえるようにする。
②同年代の日本人の子どもたち、少し年上の大学生たちと楽しく過ごしながら学習に向き合い、日本語を使うことや、教科の学習に意欲が持てるようにする。
③留学生など同国出身者と母語で、近況を話したり、活動の中でわからない言葉について説明を受けたりすることで、子どもたちがリラックスして活動に参加できるようにする。
④留学生や少し年上の同国出身者が、歩んできた経歴を話したり、子どもの進路についてアドバイスしたりする。少し年上の同国出身者を、子どもたちのロールモデルとし、将来への意識づけにつなげる。

4．「にほんご水戸の部屋」の意義

多文化共生空間の形成

水戸の部屋は同じ時間に、外国人も日本人も、大人から子供まで、国籍も年齢も生活背景も多様な人々が、お互いに関わりながらリラックスした時間を過ごす、多文化共生空間となっている。

◆外国にルーツのある人にとっての意義

◆支援者にとっての意義
・外国にルーツのある人と親しく接すると同時に、世代の異なる日本人参加者同士も接する機会となる。地域の大人・子どもとの接し方を学び、外国にルーツのある人や世代の異なる人から、様々な経験を学んだり、それぞれが将来を考えたりするきっかけとなる。
・外国にルーツのある人の生活や置かれた状況を知り、地域の問題について意識的になる。

「にほんご水戸の部屋」の意義

①外国にルーツのある子どもの将来を見据えた日本語・教科学習支援の場であること
②日本語・教科学習だけでなく、楽しく安心できる場、何かあったら相談できる場であること
③支援者が地域に住む外国にルーツのある人々を知り、多文化共生を体験する場所であること
④多文化共生を地域全体に広げていく起点であること

◆2022年12月22日（木）16:00～19:00　水戸市国際交流センター
クリスマス会　開催

◆2023年7月27日（木）16:00～19:00　水戸市国際交流センター
多文化共生まつり（開催予定）

第４報告

外国にルーツのある親子の人的ネットワーク構築をめざす活動事例報告
―東京都日野市における地域日本語教育の新しい形―

茨城大学大学院 理工学研究科 工学野 数理・応用科学領域　福村　真紀子

外国にルーツのある子どもたちとの共生を考えるなら、その親にも注目する必要があります。本発表では、外国にルーツのある子どもの親が抱える問題を取り上げ、その親子の人的ネットワーク構築をめざす活動を紹介しました。

私は、2010年に東京都日野市で、外国にルーツを持つ親子と日本人の親子が交流できる市民サークル「にほんご　あいあい」を立ち上げました。立ち上げのきっかけは二つあります。一つは、海外から日本に移住した、子育て中の外国ルーツの女性が抱える孤立と自尊感情の喪失の問題です。彼女たちが子育て中の日本人親子と繋がり社会参加ができれば、その問題が緩和されると考えました。もう一つのきっかけは、多くの地域日本語教育の現場における、日本人または日本語母語話者と外国ルーツの参加者の「教える－教えられる」関係の固定化に対する疑問です。せっかくの「地域」ですから、「学校」という枠組みに囚われず同じ市民が対等に交流できる場を理想としました。そこで、明示的・体系的な日本語教育ではなく、外国ルーツの親も日本人の親も同じ参加者として日本語によるおしゃべりを楽しみ、外国ルーツの親には自然に日本語に馴染んでもらう活動をデザインしました。

しかし、日本語によるおしゃべりという活動では、渡日直後の人は、日本語が理解できずサークルの中でも孤立してしまいました。そこで、外国ルーツの親が得意な自国の料理やダンスなどを他の参加者に教え、参加者が共同で何かをするデザインに転換しました。すると、彼女たちはイニシアチブを取れることに喜びを感じ、サークルの周辺から中心へ位置を変えていきました。日本人の親たちは彼女たちに注目・傾聴し、家を訪ね合うなど人間関係がつくられ、交流を通して自然に日本語に馴染んでいくという現象が起こりました。

活動デザインの更新により、外国ルーツの親には、日本語以外のコミュニケーションの意義を示せました。今では、料理会やコミュニティ農園での農作業など日本語にこだわらない活動を定期的に行っています。また、市の行政組織や近隣の大学とも連携し、多様な視点で協働し、マンネリ化しない活動を展開しています。サークルも「にほんご　あいあい」から「多文化ひろば　あいあい」へと改名しました。日本語が話せるようになるから社会参加ができるのではなく、人的ネットワークが構築されるから日本語が後からついてくると私は考えます。親たちの人的ネットワーク構築は、子どもたちの人的ネットワークも広げるはずです。

2023.7.1　大学連携シンポジウム@茨城キリスト教大学

外国にルーツのある親子の人的ネットワーク構築をめざす活動事例報告

東京都日野市における地域日本語教育の新しい形

多文化ひろば
あいあい

茨城大学　大学院　理工学研究科
数理・応用科学領域

福村　真紀子

外国にルーツのある子どもたちと共に生きることを考えるなら…

外国にルーツのある子どもの親にも
注目することがとても大切

お話のポイント

日本語にこだわらない
日本語教育

地域のコラボ

多文化ひろば　あいあい

設立：2010年2月22日
対象者：多様な国や地域にルーツを持つ親子
（日本人親子も参加）
目的：地域の人たち同士の交流
➡裏目的には日本語教育
場所：日野市内の公共施設
活動日時：不定期

※参加人数は都度違う
（１０名～、大きなイベントでは100名）

○日野市子ども家庭支援センター「子育て支援グループ」
○日野市社会福祉協議会「ボランティア団体」

☆立ち上げ時は「にほんご　あいあい」だった！

日野市

人口（2023年6月1日現在）
187,494人
●外国人住民　3,573人　→1.9%
中国、韓国、ベトナム

※日立市人口（2023年6月1日現在）
167,149人
●外国人住民 1,492人（2022年）
中国、ベトナム、フィリピン

なぜ「あいあい」を立ち上げたのか

外国ルーツの育児中女性の問題

孤立・自尊感情の喪失

↓

人的ネットワークが構築できない

地域日本語教育に関する問題

教えるー教えられる

↓

非対等な関係の固定化

before：「にほんご　あいあい」

雨の日も子どもと
一緒に楽しめる
場所は・・・

子どもが一番喜んだ
プレゼントは・・・

日本語による会話を活動のコアに

問題発生！！

サークル内で孤立

after：「多文化ひろば　あいあい」

活動を牽引できる好きなこと・得意なこと
を活動のコアに

「あいあい」の変容

【私】
日本語への
こだわりをやめ、
活動のコアを更新

【外国人参加者】
イニシアチブをとり、
周辺から中心へ

【日本人参加者】
注目、傾聴
→人間関係構築

言語以外の
自己表現

周辺参加から十全参加に向かうプロセスで、「あいあい」という
コミュニティ全体が変容していった。

「にほんご　あいあい」➡「多文化ひろば　あいあい」

活動のコアを更新した効果

他の人にはできないことを発信する
⇨イニシアチブの循環

自尊感情の
取り戻し

他者による注目・傾聴
⇨人的ネットワーク構築

孤立からの
脱却

コラボが
大切！

大学と地域の連携の可能性

小さな一歩としての提案

官学民あいあいムサビプロジェクト

- 日野市子ども家庭支援センター
- 日野中央公民館
- 武蔵野美術大学
- 日野国際友好クラブ（地域日本語教室）
- 多文化ひろば　あいあい

親子 de 多文化交流
2016年～

行政と

大学と

プロジェクトの顔合わせの日、あいあいメンバーが、
出自国の料理を学生と一緒に作り交流する。

地域のコミュニティ農園と

「あいあい土遊びプロジェクト」（2020年度～）

NPOと

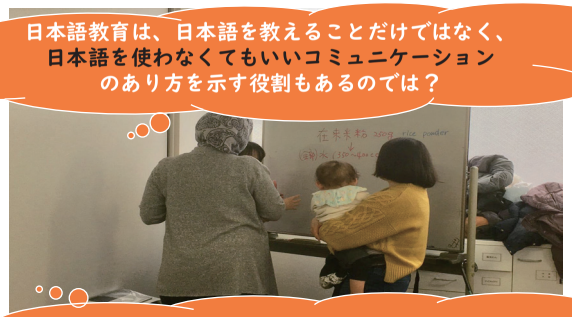
お話のポイント

日本語にこだわらない
日本語教育

地域のコラボ

多言語多文化社会の地域日本語教育って、なんだろう？

日本語教育は、日本語を教えることだけではなく、
日本語を使わなくてもいいコミュニケーション
のあり方を示す役割もあるのでは？



親たちの人的ネットワークの構築が、
子どもたちの人的ネットワークも広げるのでは？

なぜコラボが大切なのか

- 活動場所の幅が広がる・￥０で使える
- 参加者の幅が広がる
  →ネットワークが広がる
- 多角的な企画により、
  活動がマンネリ化しない
- 地域を支えるステークホルダーとなる
- 他分野の活動・課題を知る
  →（純粋に）勉強になる！

親子イベントの動画

https://drive.google.com/file/d/1ZcCMAmpdqnJ2g78hJ8QXEEmjEqsQNeDJ/view?fbclid=IwAR13DVVjYpDEqV6JbUqRuUjytm5dW8wQlSzSg3S9GbOVUJ2H3ZRA9xMv1-c

多文化共生とは何？を考えるための動画

https://www.youtube.com/watch?v=DMTcw7asR50

ご清聴ありがとうございました！

多文化ひろば
あいあい

makiko.fukumura.km65@vc.ibaraki.ac.jp

モデレーター

茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科　中山健一氏

パネリスト

茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科　岩間信之氏
筑波大学 人文社会系　澤田浩子氏
茨城キリスト教大学 文学部 児童教育学科　中島美那子氏
常磐大学 人間科学部 コミュニケーション学科　飯野令子氏
茨城大学大学院 理工学研究科 工学野 数理・応用科学領域　福村真紀子氏
茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科　勝山紘子氏

中山氏

短い時間ではありますが、これからの30分間を、パネルディスカッションに充てたいと思います。司会は、前半と同様に、茨城キリスト教大学の中山が担当します。パネラーは、趣旨説明および支援報告を担当した5名に加え、本学教員の勝山紘子さんにお願いしています。勝山さんには、地域の日本語教育支援にかかわっているという立場でご参加いただきます。フロアの皆様から、たくさんの質問をお寄せいただきました。ありがとうございます。時間の関係上、全てのご質問には答えられないことを、あらかじめご了承ください。

それでは、順番に質問をさせていただきます。まず、岩間さんへの質問です。シンポジウム全体に関わる内容です。「今回のシンポジウムのテーマは、本来は行政が中心となって議論するべきであると考えます。この点を踏まえ、今後の行政の役割についてお伺いします」というご質問です。

岩間氏

ご質問ありがとうございます。だれがまちづくり活動の音頭を取るかについては、多様な意見があると存じます。私個人としては、外国にルーツのある子どもの支援も含めたまちづくり活動全般は、行政に一任するのではなく、地域住民が連携して行うべきであると考えています。その点で、大学が地域で果たすべき役割は大きいと思います。もちろん、行政の方々や学校の先生方、日本語学校等の皆様方も同様です。今回のシンポジウムは4大学連携という形で開催しましたが、茨城県や日立市などにご後援いただいています。また、本日は学校関係者や日本語学校関係者、一般の方々などにも会場にお越しいただいています。これからも、地域で連携してこの問題に取り組んでいきたいと考えています。

中山氏

ありがとうございました。続きまして、澤田さんへの質問をいくつか紹介します。一つ目は、「オンラインで支援活動をするためのノウハウを知りたい場合にはどうしたらいいのか」という質問です。いかがでしょうか。

澤田氏

ご質問ありがとうございます。私たちもオンライン支援のノウハウを最初から持っていた訳ではありません。今も試行錯誤を続けながら活動しています。4年たった今でも、正解はありません。オン

ライン支援のための教材や、支援活動のノウハウを皆様にご提供できると良いのですが、今すぐにご提供できる状況にはありません。ただ、長年この活動に携わってくれている学生たちが、支援活動のなかでの工夫や注意点をまとめ、リスト化してくれています。もしご希望があればこうしたデータをお送りすることは可能です。また、こうした情報を一般公開するようなサイトを、出来るだけ早い段階で公開したいとも考えています。

私たちは、先ほどの福村先生のご報告にもあった通り、日本語を教える・教えられるという関係ではなく、お互いが自己開示をしながら話をする中で、外国ルーツの子どもたちが自然と日本語を身に着け、日本語を使う機会が増えていくような場づくりを目指しています。そういう意味では、日本語学習のための効果的な教材というよりは、互いが話をするきっかけとなる、子どもたちの食いつきが良い材料を集めています。いまのところ、私がお話しできるのは以上です。

中山氏

澤田先生に質問がもう一点あります。「オンラインという閉じた空間で支援対象の子どもとサポーターである大学生がやり取りをする際、プライベートに関する質問や、回答が難しい質問などが出てくることもあると思います。この場合、大学生に過度な負担がかかってしまうのではないかと推測します。こうした事態は実際に起こり得るのでしょうか、またこうした事態を避ける対策を取られているのでしょうか」という質問です。

澤田氏

ありがとうございます。オンラインは閉じた空間なので、子どもたちから発せられる言葉にサポーターがどういうふうに対応するかは、その場のサポーターの力量に関わってくると思います。学生たちは、プライベート等に係る質問に対して「さあどうかなぁ、考えてみてね」などと、質問にあえて答えない形で対応するスキルを持っているようです。また以前、「先生の個別の連絡先を教えて欲しい」という子どもたちの希望にどう対処するかが、問題になったことがあります。その時には、私の方で学生たちを集めて話し合いました。日本語支援事業は大学の授業であるため、大学以外の場での交流を規制することは可能です。しかし、私は学生たちに、授業の履修者としてではなく社会の一員としてこの支援活動に関わる自覚をもってもらいたいと思っています。そのため、子どもたちとの付き合い方はみなさんの判断に委ねますという形で、話し合いを終えました。もちろん、連絡先を交換したことで後々トラブルになるようなことがあれば、私がサポートに入ります。そのことは、大学生たちにも伝えてあります。

中山氏

ありがとうございました。続いて中島さんへの質問です。「クローバーの活動はとても有益だと思いますが、平日開催の場合、共働き世帯の参加は難しくなります。開催日を休日にすることは可能でしょうか」という質問です。

中島氏

ご質問ありがとうございます。おっしゃる通りです。しかし、休日に開催する場合、保育士さんの確保や学生の参加が難しくなります。ここが難しいところです。心理士として参加している私ともう

一人の教員は、休日対応は可能かもしれませんが。ちなみに、これは日本人のご家庭の例なのですが、平日のクローバーの時間だけお母さんが仕事をお休みして参加される事例もあります。昨年はお父さんも2組ほど、仕事を抜けてクローバーにいらっしゃいました。それでも外国にルーツのあるご家庭の中には、平日に仕事を抜けることが難しい方も多いと思います。私たちは、多くの方にクローバーの支援をお届けしたいと考えていますので、要望が多いようでしたら、休日開催も真剣に検討します。

中山氏

もう一点質問が来ています。「外国ルーツのお子さんやお母さんがクローバーを利用する上で、料金と言葉の壁が大きな障壁になっている、とのお話がありました。料金は仕方がないとしても、言葉の壁を超えるために何かできることは無いのでしょうか」、というご質問です。

中島氏

ありがとうございます。まず一つ考えているのは、通訳ボランティアの方々にご協力をお願いするということです。日立市内にも、このような団体の方がたくさんあると聞いています。こうした方々に、「一緒に子育ての勉強をしましょう」という気楽な雰囲気で、クローバーにご協力いただけると大変ありがたいです。また、先ほど報告させていただいたトリプルPは、映像をふんだんに用いています。このプログラムを開発されたオーストラリアのマット・サンダース先生もご出演されており、英語でお話をされています。日本語が苦手でも英語を話される方なら、割と理解しやすいと思います。また、外国にルーツのある方々にお越しいただけるなら、やさしい日本語での講座の進行も検討します。

中山氏

続きまして、飯野さんに対し、「外国にルーツのある子どもが日本語の部屋に入室する際に、保護者との面談などは実施されていますか」という質問が来ています。

飯野氏

ご質問ありがとうございます。特に面談は実施していません。いらっしゃったらすぐに「どうぞ」という開かれた感じで受け入れています。親しくなるに従って、少しずつお話ししていくという感じです。

中山氏

これは澤田さんとも関係するかもしれませんが、外国にルーツのある子どもの支援においては、一緒に遊んだり理解し合ったりという人間関係の構築以外に、進学や受験対策も求められます。ここが大きなジレンマであると思います。この点をどう対応されているか、教えていただけるでしょうか。

飯野氏

まずは私の方からお答えさせていただきます。私が活動するにほんご水戸の部屋に来ているお子さんは、むしろ私の方がテストの点を取る方向に気を向けてほしいと考えてしまうくらい、みんな勉強をしたがりません。最低限の日本語学習をやって、あとはみんなと遊ぶんだ！といった状況です。私はいつも、この子たちにどうやって勉強に目を向けてもらおうか苦心しています。私と一緒に支援し

て下さっている先輩方は、「子どもってこういうものでしょう」とおっしゃいます。先ほど会場で私に声をかけて下さった方も、「子どもと思いっきり遊んだ方がいいですよ」とアドバイスを下さいました。みなさんは本当にお心が広いなと感じます。皆様のこうしたお言葉に、私が救われている部分が大きいです。

それでも、私は高校に通う子どもたちを見ていると心配になります。私の知る限り、茨城県では、外国にルーツのある子どもたちが高校に入学することは、さほど難しくはありません。来日して半年の子も、今年の4月に高校に入学しました。しかし、日本語初級の段階で、日常会話もままならない子が高校にいきなり入っても、勉強についていくことは本当に大変です。この子が卒業後に進学するのか就職するのかは分かりません。しかし、どちらの道に進むにしても、日本社会で生活できるくらいの日本語力の習得は必須だと思います。高校の3年間のうちに計画的に日本語を勉強しないと、日本社会からドロップアウトしてしまいます。

私は将来、仕事もしない進学もしない若者が日本社会で急増するのではないか、あるいはすでに増えているのではないか、と心配しています。これはとても大きな問題です。小学校、中学校までは、楽しく学ぶ形で良いと思います。しかし、高校ではきちんと勉強させなければいけないと、私は考えています。

中山氏

飯野さん、ありがとうございました。同じ質問ですが、澤田さんはいかがでしょう。

澤田氏

ありがとうございます。教科学習に向かう態度は、中学生と高校生で大きく違うと思っています。中学生に関しては、オンラインの授業の中で、漢字クイズや間違い探しクイズなどを組み入れながら楽しく日本語を学べる仕掛けをすれば、子どもたちはそれなりに集中力をもって50分の授業に参加をしてくれているようです。なお、本日は日本語サポーターをやっている学生たちも来てくれています。彼女たちはこのあたりを熟知してますので、もしお時間があれば話をしてみて下さい。

一方で、高校生になると、先ほど飯野先生もおっしゃったように、自分たちが高校卒業後にどう生きるかを、彼ら・彼女ら自身である程度決定しているように感じます。今の自分たちの日本語力では、どれだけ頑張っても日本人と同じようには戦えないのだということを、子どもたち自身が感じていて、そのため諦めてしまっている子どもも多いです。

中学3年とか高校生で来日した子どもの場合、母国にいた時にしっかり学習をする態度や習慣を身につけていれば、2・3年集中的に日本語を勉強することでN3やN2くらいの日本語力を身に着けることも可能でしょう。問題は、中学生ぐらいで来日し、日常生活上の生活言語をある程度身につけている子どもたちです。こうした子どもたちは、クラスの友達や先生と気楽に話したり、じゃれあったりする程度の日本語力は十分持っています。自分の主張を通したり、嫌なことは嫌だと日本語で意思表示したりすることも可能です。こうした子どもたちが、さらに時間をかけてレベルの高い日本語を習得したり、教科学習に取り組んだりする意欲を、私たちがどうやって引き出すかがポイントです。彼らと一緒に日本語力のアセスメントをする際に、「あなたの日本語力はここまで出来ているけれど、ここはもう少しだよね。こういうところを頑張れば、次のステップに行けるよ。将来の選択肢が広がるよ。」という話をします。しかし、子どもたちからは、「いや、僕は日本人とは戦いません。お父さ

んの会社を継ぎます。僕は外国人なんだから、これで良いんです。」といった反応が返ってきます。彼ら・彼女らは、自分たちの置かれている状況をちゃんと理解し、将来のことも考えたうえで発言している訳です。この段階で私たちがどういった支援を出来るのか、非常に難しい問題に日々直面しています。

キャリア支援については常に言われることですが、子どもたちが中学生や高校生になり、将来の進路を選ぶ段階になってからキャリアを考えるのでは遅いのだと実感します。

中山氏

ありがとうございました。続きまして福村さんには、「日野市でのあいあいのような活動を、他県、とくに日立市で行う場合にはどうしたら良いのでしょうか」という質問が多数寄せられています。いかがでしょうか。

福村氏

ありがとうございます。実は、休憩時間中も、同じような質問というかコメントをいただきました。私は今でもたまに東京に帰って、コミュニティ農園の活動をしたり、様々なイベントを行ったりしています。でも、日立市からの移動は大変です。片道3時間かかるし、お金も往復で1万円はかかります。日野市の活動では行政から助成金をいただいていますが、交通費は捻出できないことになっています。長距離での活動に限界を感じているところです。そのため、日野市のあいあいの活動はメンバーの誰かに任せて、私は日立市で新たな活動を立ちあげたいと思っています。イニシアチブを循環させるということにもなりますし。日立市では、小さいことから始めていきたいと思っています。私は今、茨城大学の大学院に所属しています。そこには、子育てをしながら学業に励んでいる学生がいます。まずは、この身近な親子と一緒に活動し、小さいことから支援を始めて、徐々に活動の輪を広げていきたいと考えています。もしご興味がある方がいましたら、ご協力いただけると幸いです。

中山氏

ありがとうございました。最後に勝山さんへの質問です。先ほどの岩間さんへの質問にも関係してきますが、市町村といった現場レベルでの行政の役割について質問が来ています。いかがでしょうか。

勝山氏

はい、ありがとうございます。まずは先生方、非常に熱のこもったご講演ありがとうございました。改めて、多文化共生の場作りをするには熱い思いが必要なのだと実感いたしました。私は子ども支援には携わっていませんので、ここでマイクを持たせていただくのは本当に申し訳なく思っています。しかし、ご紹介にもありましたように、私は市民ボランティアとして、ひたちなか市で外国人の日本語支援にあたっています。本日はその立場から、ひたちなか市の現状を行政との関係でお話しさせていただきます。

ひたちなか市では、行政と教育委員会、市民ボランティアが連携して子育て支援の体制をつくっています。同市では、2003年に市民活動課が「ひたちなか市国際交流ボランティアバンク」を立ち上げました。このボランティアバンクに教育委員会が利用申請をすることで、バンクに登録しているボランティアの支援員さんたちが依頼のあった学校に赴き、当該児童の日本語支援に当たっています。現

在は、幼稚園3園、小学校4校、中学校1校、義務教育学校1校に、合計10名のボランティアが赴いて日本語の支援をしているそうです。このボランティア活動にも、まだまだ課題はあると思います。しかし、行政が中心となって1つの支援体制を作ってる点は、高く評価できると考えています。

中山氏

ありがとうございました。残り時間が5分ほどあります。最後に、全員に対する質問をご紹介します。少し難しい質問です。「活動の資金的あるいは人的リソースはどのように確保していますか」というものです。順番にお一人ずつお答えをお願いします。

岩間氏

本日登壇された方々それぞれのお立場で、資金や人的リソースは異なると思います。茨城キリスト教大学では、IC with Uという支援活動を展開しています。この活動は、完全に大学のカリキュラムと一体化しています。大学生たちは、多文化協働の学びの一環、あるいは教職課程や日本語教育の実践の場の一つとして、外国にルーツのある子どもたちと関わっています。一方、子どもたちにとっては、日本語を学ぶこともそうですが、何より大学に来てお兄さんやお姉さんと交流することが嬉しいようです。IC with Uは大学カリキュラムの一環ですので、経費はほとんどかかっていません。大学生と外国にルーツのある子どもたちがWin-Winとなる形で事業を運営しています。

澤田氏

筑波大学で委託を受けているグローバル・サポート事業は、委託元の茨城県から委託金を受けて活動しています。またサポートをする学生たちは、「外国人児童生徒支援研究／支援実習」という授業を履修し、大学のカリキュラムの一環で活動をしています。

人的リソースに関しては、ご登壇された全ての先生が同じであると思いますが、私自身もとても大きな労力を割いています。ただ、ありがたいことに、いまは心強いサポーターがいます。グローバル・サポートを始めて4年目になるのですが、当初大学の4年生でこの活動に参加した学生が、その後外国にルーツのある子どもたちのキャリア支援をテーマに大学院に進学し、昨年末に修了しました。今年度、彼女がこのプロジェクトのスタッフとして戻ってきてくれました。彼女は今、日本語コーディネーターとして大学と中学校をつなぐ仕事を担当してくれています。グローバル・サポート事業が、学生の学びや活動の場であるだけでなく、その後の日本語教育のキャリアパスの一つとして、地域の中で働く場の創出につながっていくと良いなと考えています。

中島氏

先ほどは活動における金銭面の現状についてお話しさせていただきました。そこで今回は、異なる視点から財的資源と人的資源についてお話しさせていただきます。茨城キリスト教大学で子育て支援を立ち上げたのは7年前です。立ち上げの際に、色々な地域に視察に行きました。とある地域では、都道府県の行政が中心となって、地域の各大学を取りまとめていました。大学には教員や学生がたくさんいるので、人的資源は豊富です。そこで行政が音頭を取り、子育て支援や外国ルーツのお子さんがいる家庭の支援など、地域課題に対する様々な支援について各大学に人的資源の提供を依頼していました。財的資源については、教員や学生は行政から交通費などをいただいているとのことでした。

茨城県でも、このような支援体制があると、私たちは活動しやすくなるのではないでしょうか。

飯野氏

にほんご水戸の部屋は、先ほどもご説明させていただいた通り、水戸市国際交流協会との共催です。そのため、場所代やコピー・文房具のような物品は、交流協会からご提供いただいています。一般的に、実費を外国人の方にご負担いただいているボランティア教室が多いと思うのですが、私たちはこうした必要経費を無償にさせていただいています。それ以外には、私や大学生たちが私物の漫画や絵本などを提供し、教材として使っています。こうした教材は、交流協会にご提供いただいているロッカーに収納しています。

次に人的リソースについてですが、ボランティアさんは私との関係性の上で協力して下さっています。また常磐大学にも、子どもの支援に興味がある学生が結構います。そのため、大学の授業と紐づける工夫もしています。たとえば、私の授業の受講生には2回の支援参加を課して、報告書を提出させるなどしています。

にほんご水戸の部屋では、一般的なボランティア日本語教室にありがちな、「スタッフは休んではいけない」や「教えるためには入念な準備が必要」といった伝統的なスタイルは取っていません。「来られるときに来れば良いし、準備をしてこなくても良い。その場に来てくれて、その場でおしゃべりなどをして楽しく過ごしてくれればそれで良い」というスタイルでやっています。そのため、多文化共生とか子どもとか、外国人の支援にすごく興味のある人たちが、自然に集まってきてくれています。人的リソースは困っていない状況です。

福村氏

資金の方からお答えしますと、先ほども申し上げた通り、日野市の社協から毎年一定額の補助金をいただいています。額面は多くはありませんが、それで活動ができない訳ではありません。しかし、私のPPTファイルに添付したQRコードから動画を見ていただけるとわかりますが、産学官のプロジェクトでは結構大掛かりなイベントを実施しています。お金があったらあったで大規模なことができるので、お金は大切だと思います。社協からの毎年の助成金は大変ありがたいですが、大掛かりなイベントを実施するには、正直申し上げて足りません。そこで私はここ4年間くらい、様々な企業や団体の助成金に申請し、ご支援をいただいています。公益財団法人大和証券財団『ボランティア活動等助成』や公益財団法人キリン福祉財団『キリン・地域のちから応援事業』などです。現在は、東京ボランティア・市民活動センター『ゆめ応援ファンド』から、3年間の助成をいただいています。大変ありがたいです。このような財団に支援をお願いすることも、財源確保の一案であると思います。

次に人的リソースです。あいあいは活動14年目ですが、常駐しているスタッフは私一人です。イベントの時に手伝ってくれる人はもちろんいますが。先ほどの報告でも申し上げましたが、子ども家庭支援センターや公民館、大学などと連携し、こちらができない部分は連携先にお願いすることが、人的リソース確保のポイントであると思います。そうは申し上げても、やっぱり私の気持ちを汲んでくれて、一緒に動いてくれる人が必要です。私は以前、日本語教師養成講座を持っていたことがあります。そこであいあいを紹介し、興味を持ってくれた講座の受講者に手伝いをお願いしました。その方とは、長年イベントを一緒にやっています。日立市でも、これから一緒に活動をしてくださる方を募集しています。

勝山氏

私からは、地域支援団体である日本語教室ルンルンのボランティアスタッフについてお話ししようと思います。ボランティアとして学習支援を始めるには、まずひたちなか市の日本語ボランティア養成講座を受けてもらう必要があります。そこで日本語教育の基礎的な知識を学びます。日本語教室ルンルンには今4つのクラスがありまして、長く活動されているスタッフの方がたくさんいらっしゃいます。子どもに対する支援に関しては、2週間に1度、日曜日の午後に小学生のための支援クラスが開かれています。子どもの支援にあたるスタッフは、自分たちで定期的に勉強会を開催し、外国人の子どもを教えるために知っておくべき事項を、自主的に学習されています。こうした長く活動されるボランティアスタッフの方々が軸となり、ルンルンの活動は続いています。

その一方で、ボランティアを辞めていく方もたくさんいます。スタッフの流動性が高いことが、ボランティア教室に共通する悩みなのかなと思います。せっかく日本語支援をやってみようと思った人が辞めないためには、スタッフが支援に対して喜びややりがいを感じ、来週もまた来ようと思える仕組み作りが必要です。そういう意味では、スタッフ側も、「自分は学習支援をする側である」と意識するのではなく、「自分も多文化共生の当事者として一緒に楽しむ」意識を持つ必要があると感じています。

岩間氏

一点補足させてください。IC with Uの活動を担当しているのは本学の大学生たちです。日本語教育の専門家である中山先生の指導を受けた、日本語教師を目指す学生たちが中核です。IC with Uの核となる「外国人教育支援演習」という授業は、私と、本日はシンポジウムの裏方をしている鈴木晋介先生という2名の教員が担当しています。2人とも日本語教育の素人です。私たちの不足部分を、学生たちが補ってくれています。学生たちは、今日はシンポジウムのスタッフとして頑張ってくれています。若者たちのポテンシャルの高さを、改めて実感しています。

中山氏

他にも質問がありますが、時間が来ましたのでこれでパネルディスカッションを終了とさせていただきます。パネラーの皆様、それから質問を寄せてくださった会場の皆様、誠にありがとうございました。今回のシンポジウム全体を通して、「横のネットワーク」、「つながり」などのキーワードが浮かび上がってきました。重要なキーワードであると思います。その一方で、個別の実際の現場のニーズに応えるところにまでは至りませんでした。次回は、現場のニーズに応えるための、現場の方を中心としたワークショップを開催できると良いと感じました。

閉会挨拶

茨城キリスト教大学　文学部長　池内　耕作

文学部長の池内です。 本日は文学部長としてよりも、NICE（茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク）の会長という立場で、ご挨拶させていただきます。なぜ私がこのような格好をしているかというと、先ほどまで児童教育学科の教員4人で、NICE特別企画である焚火コーヒーの準備をしていたからです。閉会後に、焚火で焙煎したコーヒーを会場にお越しの皆様に心を込めて淹れさせていただきます。ブラックしかございません。コーヒーがお嫌いな方は申し訳ありません。

コーヒーについて語りだすと長くなるので、ここではNICEについて説明させていただきます。NICEとは、教職に就いた本学の卒業生や教職を目指す在学生、および本学教職員で構成される教育関係者ネットワークです。昨年立ち上げました。この活動のモチーフが焚火です。「火を灯そう」「ここにきて火を囲もう」「子どもたちのために薪をくべよう」という想いが、焚火に込められています。焚火がNICEのモチーフならば実際に焚火をしようぜ！ということになり、アウトドア派のメンバーが集まって、焚火コーヒーをご用意しました。会場の入り口にテントやコーヒーを淹れる機材が設置されてることを、皆様もお気づきかと思います。実際にコーヒーの生豆を買ってきて、一昨日の晩に会場入り口の広場で焚火をして、教員と学生たちがひたすら豆を炙りました。そりゃ、スタバで飲んだ方がコーヒーはおいしいでしょう。あちらは本格的な機材を使っていますし。しかし、私たちの心に灯った火で必死に炙ったコーヒーも、きっと気に入っていただけると思います。

今日、私は焚火だけをしに来た訳ではありません。もちろん全ての発表やディスカッションを、会場の目立たない席で聞いていました。県内各地には光が十分に届いてない部分がいっぱいあって、でもそこに火を灯す人たちがいて、あちこちで炎が燃えているということを実感しました。本当に素晴らしいと思います。

私たちも負けませんよということで、今から焚火コーヒーをサーブさせていただきます。ぜひお楽しみください。またコーヒーがお嫌いな方も、コーヒー好きのご家族などのためにお持ち帰りいただけると幸いです。ただし、素人の私たちが一から手作りでコーヒーを淹れるため、ちょっと時間がかかります。この点をお許し下さい。

本日は、長時間にわたるシンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございました。御礼申し上げます。

NICE

Network of Ibaraki Christian University Educators
茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク
since 2022

教職に就いた IC 卒業生、
教職を目指す IC 在学生、
繋がってたい IC 教職員、

ここにきて火を囲もう。
こどもたちのために薪をくべよう。

ゆるっと
会員募集中

火を灯し
薪をくべる

NICE
Network of Ibaraki Christian University Educators
茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク
since 2022

火を囲み
薪をくべる

NICE
Network of Ibaraki Christian University Educators
茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク
since 2022

あの頃の火に
薪をくべる

NICE
Network of Ibaraki Christian University Educators
茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク
since 2022

ご案内

シンポジウム終了後、NICE※焚火部によるコーヒーサーブがございます。

※ 茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク

- どなたでもご参加いただけます。
- 場所はシンポジウム会場前広場です。
- コーヒーの提供数に限りがありますのであらかじめご了承ください。

本日はご参加いただき、ありがとうございました。

アンケート結果

ご質問・ご意見
今日は、お世話になります。私のクラスにブラジル国籍の小学1年生がおります。簡単な会話はできますが、ひらがなは、ほとんど読めません。今日は、その子の役に立てばと思い、参加致しました。どうぞよろしくお願い致します。 【回答】ご参加頂き、誠にありがとうございました。
私たちの団体で2022年から外国人ママ支援Voiceを始めました。 これは子育て支援利用者支援事業の中に外国人支援の加算が80万円ほどつくので始めました。 翻訳、通訳、謝金お支払いしてやってます。 やっていることは、学校などで三者面談など、通訳が必要な時に学校に派遣しています。今のところ英語、ポルトガル語、タガログ語など話せる方をお願いしています。その他、必要があればひたちなか市にいなければオンラインでの通訳をお願いしています。 翻訳も学校のお手紙などやってます。 その他、月に一回、サロンを開き楽しく過ごしています😊 【回答】貴重な情報ありがとうございます。情報を共有させていただきます。
筑波大学澤田先生のご発表に関して：スライド5にて、「加配教員」についてのご説明がありました。支援にあたる「加配教員」に対する研修制度などはあるのでしょうか？あるのであれば、具体的にどのような研修が実施されているのか教えていただければ幸いです。 【回答】毎年、年度当初に茨城県教育委員会の主催で「帰国・外国人児童生徒連絡協議会」、8月に茨城県教育研修センターで「帰国・外国人児童生徒に対する日本語指導研修講座」が行われ、加配教員だけでなく、外国人児童生徒の在籍する学校の管理職や関心のある教員の方が参加され、校内の体制づくりや日本語指導プログラム、アセスメントの実施方法などの研修が行われています。そのほか、各市町村自治体で研修を行なっている地域もありますが、自治体によってはまだまだ研修制度が十分でないところもあるように伺っています。
１つ目の講義 プレゼンテーション、ありがとうございました。私自身も「外国人児童生徒の教育課題」について研究しているため、とても興味深く聞かせていただきました。 そこでいくつか質問がございます。 1) オンラインの活動はとても興味深く、子ども同士のつながりを作る場面としては、とても素敵だとおもいました。しかし、家に帰ってやる際には、貧困の問題によるネット環境の違いも無視できないものであると考えます。そのような家庭環境の差を踏まえた時、どのような対応をされていたのでしょうか？ 【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。 2) 学生がサポートをしているということでしたが、子どもたちにとっての居場所であり頼れる大人として学生は映ると思います。この状況下で、子どもが学生を頼ってプライベートで質問してきたり、何かを聞いてくることもあるかと思います。そうなると、ボランティア側の負担が大きくなり、継続が難しくなるのではないかと考えます(実際自分が日本語教室のボランティアをしてる時には、そういうことがあったので…)。そこの対応等について、何かアイデアがあれば教えていただきたいです。 【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。

ご質問・ご意見
3) こちらは感想になります。最後の方に出てきた「正しさのジレンマ」について。 これは文化等の課題だとも思いますが、親自身が生きてきたものをモデルとして子どもを育てているということなのではないかなと自分は考えています。外国人児童生徒たちの課題の中で、モデルの少なさというのはとても大きな問題だと自分は感じております。 【回答】ご指摘のとおりであると存じます。外国人集住地域では、モデルとなる先輩が若い子育て家族をサポートする場面をしばしば見かけます。モデルの少なさは散在地域の大きな問題点であると思います。 貴重なお話、ありがとうございました。
支援が必要な児童生徒に取り出し教育をするには、教員が付いていなければならないという決まりがあるらしいです。そのあたりが日立市のような散在地域では支障です。放課後にクラブ活動のような扱いなら良いみたいですが。 【回答】貴重な情報ありがとうございます。茨城キリスト教大学でも、こうした放課後クラブを模索した時期もありました。しかし、自宅から大学までの「距離」が大きな障壁となっています。難しい問題です。
石岡市で日本語教育ボランティアをしていますが、子どもたちに何も出来ずに虚しさを感じています。これから子供たちを支援する地域の核を作るのは重要かつ必要な事だと考えております。今後の事を考えると筑波大の取り組みなどをお手伝いさせて頂き、ノウハウを勉強出来たらと思いますが、そのような事は可能でしょうか？ 【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。
日本語学習を授業で行なっている学生です 会話やコミュニケーションを中心に楽しく学習支援をしたい派とテストやプリントを解く塾形式の学習方法派で学生同士の意見が分かれます。 日本語支援ではどういった姿勢で行うべきなのでしょうか？ 【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。
社会から認知されていない顕在化されていないサポートを必要とする外国人を発見する手段について、具体的な事例があればご教示いただけるとありがたいです。 【回答】大変難しい問題です。茨城キリスト教大学を例にすると、教育委員会から紹介して頂くことに加え、住民のツテを頼って地道に要支援者を探しています。
保育現場でトリプルpやクローバーなどに外国ルーツの方が参加できればよいという意見は私も同意です。 しかしどのプロジェクトもアドバイスやディスカッションがあるため言語の壁があり、ハードルが高く感じます。外国ルーツの方に参加を促すためには料金のことよりも言語によるハードルを下げることが重要だと考えます。 【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。

ご質問・ご意見

プレイグループ「クローバー」は、とてもいいものだと思った。しかし、参加する日が全て平日だったことが気になった。平日だと、わざわざ仕事を休まなければいけなくなり、参加したくてもできない人がいるのではないかと思った。共働き世帯や、ひとり親世帯の人たちは、平日働いていることが多く、休みを取ることは難しいのかなと感じるため、休日にできればいいなと思う。

【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。

・4つのご報告を休みなく伺うのはなかなかハード。途中に休憩時間があった方がありがたかった。
・岩間先生へ:
外国人の子どもたちの健康状態についてのご調査結果、興味深く伺いました。
ご調査の中で「テレビ2時間視聴」という項目がありましたが、これは日本のテレビ番組ということでしょうか。私は30年ほど外国にルーツのある子どもたちと接してきているのですが、以前に比べていわゆる「テレビ」のある家庭が大変少なくなって来ていて、日本のテレビを見ている子たちが少なくなっていると感じています。多くの子どもたちが、YouTubeやNetflixを見ていると思われるのですが、これらの視聴は先生のご調査では、どの分類になるでしょうか。

【回答】3歳児健診のデータでなので私も詳細はよく分かりません。おそらく日本語と母語の両方だと思います。しかし、ご指摘の通り、私もスマホ視聴の方が圧倒的に時間が長いと思います。私の知り合いは（就学前児童については）母語の動画を視聴しているようです。

・ご登壇の先生方へ:
本シンポジウムの目的は「県北の連携のきっかけづくり」ということで、地域のネットワークの構築を目指していると思います。今後のますます外国人児童生徒の増加を考えると、地域のネットワークの構築はとても大切な課題です。しかし、外国人の人たちはいきなり地域の中に飛び込んでくるわけではなく、就労者であれば会社、留学生であれば学校という受け入れ先があって日本に来ています。そうした受け入れ先が、外国人の家族の受け入れについて何の体制もなく、外国人の人たちの生活や教育についての課題を地域に丸投げするのは、社会的に無責任ではないか、という気がします。
そこで、先生方の大学では、ご自身の大学の留学生の家族帯同についてどのようなケアをされているのかお話しいただけないでしょうか。
留学生は「外国人住民」の一部ですが、大学の受け入れ体制を明示することで、他の外国人を受け入れをしている機関の参考になるのではないかと思います。

【回答】一般的な学部で学ぶ留学生の大半は、単身で来日します。また、一定程度の日本語力と経済力をすでに有しているため、支援はさほど必要としません。一方、理工系・医学系を中心とした専門性の高い大学院や研究機関で学ぶ留学生・若手研究者に関しては、学術的な場面では英語の運用能力が求められるため、大学側は当人の日本語運用能力をさほど重視しない傾向にあります。特に博士課程の学生は、日本語学習経験がなく日本にやってくるケースが見られます。そのような学生の中には、家族帯同で生活している人もいます。子育て中であってもなくても、彼ら自身と家族にとって日本語は生活上はずせないコミュニケーションの手段です。しかし現状では、日本語支援を必要とする留学生・若手研究者に対する大学側の対応は、地域日本語教室への参加を勧めるなどの情報提供に留まっています。市民ボランティアにサポートを丸投げするのではなく、また大学側だけが責任を負うのでもなく、社会全体がホリスティックに留学生とその家族へのサポートのシステムを作っていくことが、外国人高度人材を日本の社会を構成する一員として育てる意味でも、大切なのだと考えます。こうしたシステムをどのように構築していくかが、現在の大きな課題です。

・茨城キリスト教大学　中島先生へ:
茨城キリスト教大学のプレイグループ「クローバー」の活動について、大変感銘を受けました。
残念なことに、有料であったり言語の問題のために、外国人家庭の参加はないとのことですが、

ご質問・ご意見
そもそも外国人の方たちにこの情報は伝わっているのでしょうか。外国人家庭に届くために具体的に何か工夫されていることがおありでしょうか。 【回答】「プレイグループ クローバー」にご関心を寄せてくださいまして、ありがとうございます。ご指摘の通り、「外国にルーツのある子育て家庭にこの情報が伝わっているか」は確かにもう一つの課題だと思います。私（中島）は、近隣市町村保健センターの心理相談員をしていることもあり、発達の気になる子どもさんのことで保健師さんと連携することも多く、常々保健師さんには「クローバー」が外国にルーツのあるご家庭にも開いていることはお伝えしている状況です。ですので、保健師さんからお声がけいただくことも今後は増えるかもしれません。ただし、もっと積極的な周知にも力を入れていかなければなりませんね。その点ではまだ不十分であり、今後考えていかねばなりません。 ・常磐大学　飯野先生へ: つくば市で放課後支援を行なっており、「水戸の部屋」の子どもたちの様子を共感を持ちながら伺いました。お話しを聞きそびれてしまったのかもしれませんが、小学生は何年生の子どもたちでしょうか。また人数が小中学生が少ないようですが、その理由は、保護者が働いているためでしょうか。 【回答】水戸の部屋に通っている小学生で、スライドに書いた3名は3年生、5年生、6年生です。小学生が少ないのは、自分で教室まで来られないことが大きな原因だと思います。ご指摘の通り、保護者が働いていると送ってもらえません。中学生・高校生になると、自転車やバスなどで自分で来ることができます。
子どもたちの学習意欲の低下とありましたが、何か外国にルーツのある子どもに特徴的な要因はみられますか？ 【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。
飯野先生の日本語支援への意見です。 支援への課題でオンラインの模索のお話がありましたが、私も学習者の子たちにオンライン参加をしてもらうのは年齢が低ければ低いほど難しいように思いました。 そこで、携帯は持っているというお話だったのでYouTubeやTikTokなどで日本語に関する動画を投稿し、任意で観てもらえる環境をつくるのはどうかなと思いました。「にほんご水戸の部屋」なので水戸についての動画とかも作ってみると面白いと思います。 この方法であれば拘束時間も少なく、にほんご水戸の部屋に対する興味も湧くかもしれません。 【回答】ご提案、ありがとうございました。面白そうですね。ぜひ参考にさせていただきます。
日本語をやりたがらない子は思いっきり遊ばせてあげたら良いのではないでしょうか？ 日本が楽しい！って思ってもらえたら日本語やりたいと思うかもしれないと思いました。 まずは、コミュニケーション、つながり、楽しく生きるということかな、と思いました。 【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。
オンラインの日本語支援がもっと広い地域でできたらいいなと感じました。他大学でも日本語教育に関心のある学生はいると思うので、大学同士の連携ができるのであれば、するべきだと思います。 【回答】ご指摘ありがとうございました。大学間の連携を目指してまいります。

ご質問・ご意見
「日本語を使わなくてもいいコミュニケーション」という考え方はとても大切だと思います。 しかし、澤田先生のお話にもあったように、子どもたちは学校で、日本の学校で求められているものに応じたいと思うのも事実です。このギャップをどのように埋めていくことが可能でしょうか。 【回答】パネルディスカッションで取り上げさせていただきました。
興味深い話が多くあり、参加できてよかったです。もし機会がありましたら、今回限りではなく、開催していただけると嬉しいです。 【回答】ありがとうございました。継続的な事業になるよう尽力します。
とても勉強になるお話をありがとうございました。外国にルーツのある方は日本で孤立することが多いということでしたが、茨城県には外国にルーツのある方自身が主体の組織などはあまりないのでしょうか。 【回答】地域によります。県西・県南地域にはエスニック・コミュニティが存在しますが、県北地域はほぼ存在しないようです。
とてもよい企画で、熱のこもった講演ばかりでした。大変参加になりました。 【回答】ありがとうございました！
どの講演も豊富な知識と経験に基づいていて、すごく勉強になりました。最後の「光に当たってない場所にあかりを灯す」という言葉がぴったりだと思いました。 実際に手を動かし汗を流して活動されている方がこんなにいること、学生さんたちの活躍に励まされました。 今日の講演からたくさんヒントを頂いて、今後の活動に活かしていきたいです。 【回答】ありがとうございました！
子どもへの支援は今後も充実しそうだが、保護者が取り残されるのが心配です。未就学児のう歯予防ついては、市町村の保健センター等で、保護者への歯磨き指導、子どもへの仕上げ磨きの練習といった場を設定し、歯磨きの習慣を形成するような取り組みが可能であると思った。通訳がいればありがたいが、不在でも、ICT教育用の動画教材が沢山開発されており、ライオンやサンスターに依頼すれば各国の翻訳版ができるのではないかと思う。健康保険に加入していないと医療費がかさむ。親の歯肉炎→入れ歯も早く始まるのではないかと気になった。学校保健の及ばない年代への対応も重要で、せっかく日本で生活するなら、健康で満足していただきたいと思った。 【回答】未就学期における子どものう蝕は、歯磨き等の指導以前に、親がどれだけ子育てに力を入れているか（ネグレクト状態であるか否か）が問題となります。実は、日本人世帯の間でも、同様の状態にある子どもが散見されました。根の深い問題です。
［感想］どの講演も非常に興味深い内容で面白かったです。 データとしても出ていましたが、わたし自身、茨城の県北地域で暮らす中で外国にルーツを持つ方と関わることはほとんどありません。外国にルーツを持つ方へのサポート体制を整えることが現在進行形の課題の一つですが、県北地域に至ってはまだその段階にすらいないのかもしれないと思うとまだまだ発展していかなければいけないなと実感しました。 大人になってからのこのような場は、学生時代よりも面白みが増し、一つ一つじっくりお話を聞きたいと思いました。またこのような機会があれば参加したいです。 【回答】ご参加ありがとうございました！

４大学連携シンポジウム
外国にルーツのある子どもたちと共に生きよう
報告書

発行日　令和５年１０月１２日
発　行　茨城キリスト教大学
連絡先　岩間　信之（茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科 教授）
ＴＥＬ：０294-52-3215㈹
E-mail：inob@icc.ac.jp

主催：茨城キリスト教大学

共催：茨城大学、筑波大学、常磐大学

後援：茨城県国際交流協会、茨城県県北生涯学習センター、
茨城県教育委員会、日立市教育委員会、
NICE（茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク）